



Title	プロレタリアートの独裁と過渡期の教育 : 労農予備校(Пафак)の発生・発展・消滅過程にかんする実証的研究
Author(s)	竹田, 正直; Takeda, Masanao
Citation	スラヴ研究, 7, 67-104
Issue Date	1963
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4967
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113180.pdf



プロレタリアートの独裁と過渡期の教育

——労農予備校（Рабфак）の発生・発展・消滅
過程にかんする実証的研究——

竹 田 正 直

はじめに

- I ソビエト政権初期の教育政策の矛盾
 - II 人民大衆の創造性と労農予備校の発生
 - III 復興期から建設期における労農予備校の発展
 - IV 社会主義建設の達成と労農予備校の消滅
 - V 過渡期の教育法則と近代教育理念の超克
- おわりに

はじめに

ここでいう「過渡期」とは、プロレタリアートの権力が樹立されたときに始まって、共産主義の第一段階である社会主義建設が達成されたときに終る、特殊な歴史的時期をさす。ゆえに、一般的にいう、資本主義から共産主義への広い意味での過渡期ではなく、その第一段階としての資本主義から社会主義建設達成までの狭義の時期を意味する。したがって広義の過渡期に貫徹される普遍性は、いうまでもなくここでいう過渡期にも貫徹される。

「資本主義と共産主義とのあいだに一定の過渡期があることは、理論上疑いをいれない。この過渡期は、この二つの社会経済制度の特徴または特性を一つに結合したものとならざるをえない。この過渡期は、……打ちやぶられたが絶滅されていない資本主義と生まれはしたがまだまったく弱い共産主義との闘争の時期とならざるをえない。」⁽¹⁾ 過渡期の存在がなぜ「理論上疑いをいれない」普遍的なものであろうか。それは、社会主義社会とそれ以前の階級社会との生産手段の所有形態における根本的な差異に、その基礎をおいている。ブルジョア革命は、ブルジョアジーが権力を握ったときに終るのであるが、プロレタリア革命は、プロレタリアートが権力を握ったそのときから始まるのである。⁽²⁾

それゆえ、過渡期における一般的経済政策は、プロレタリアートの権力が経済の基幹部門を握ったうえで、打倒されたがいまだ残存する強大な資本主義的ウクラードと、生

(1) レーニン、「プロレタリアートの独裁の時期における政治と経済」、全集、大月版、第30巻、94頁。

(2) Под ред. А. П. Погребинского, «История народного хозяйства СССР (1917–1959 гг.)», Госизд. «Высшая школа», 1960. стр. 9.

れでたものの、いまだ力の弱い社会主義的ウクライドとの共存競争により、最終的には社会主義の勝利へと導く経済政策であり、ソ連邦においてそれは「新経済政策」と呼ばれた。

土台における社会主義的部分が弱い過渡期——とくにその初期には、上部構造の果す役割はとりわけ大きい。なかでもプロレタリアートが手中にした権力は、「古い経済を建てなおして、新しい経済を組織するためのこととして利用される」⁽¹⁾ほどに、その果す役割はもっとも大きいといわなければならない。その政治権力における過渡期の普遍性が、プロレタリアートの独裁である。

「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的変革の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この過渡期の国家はプロレタリアートの革命的独裁でしかありえない。」⁽²⁾

「プロレタリアートの革命的独裁とは、ブルジョアジーに向けられたプロレタリアートの暴力によって奪取され、維持される権力であり、如何なる法律にも縛られない権力である。」⁽³⁾

「階級闘争を承認するにすぎないものは、まだマルクス主義者ではない。…階級闘争の承認をプロレタリアートの独裁の承認に拡張する人だけが、マルクス主義者である」⁽⁴⁾

プロレタリアートの独裁の役割は何か。それは、プロレタリアートの階級的目的の遂行であり、第一に、ブルジョアジーの反抗を弾圧すること、第二に、労農同盟を強固にすること、第三に、資本主義の廃墟の上に社会主義を建設すること、の三つである。それゆえ、プロレタリアートの独裁は、プロレタリア民主主義と同義語であり、人民にとっては、階級社会にはありえない、もっとも広範な真の民主主義を意味している。

過渡期における教育もまた、政治と同様、相対的安定期に比して、その役割が一層増大する。このことは、過渡期の土台の性格に規定されている。土台の社会主義的部分が弱く、激動する過渡期の教育は、一つの社会経済構成体が発展している相対的安定期の教育とは比較にならぬほど大きな影響を土台に及ぼす。とはいえ、歴史的原則としての教育と生産的労働の結合原則は過渡期においても貫徹する。教育と生産的労働の結合はマルクス主義教育学の基本原則と考えられながらも、いまだ、その結合構造は明らかにされていない。この結合構造について、筆者はつぎのように把握する。人間疎外の回復と全面発達をめざす教育と生産的労働の結合は、まず、二つの部分から成る。すなわち第一の部分は、労働の生産物からの疎外の回復にかかわるものであり、生産的労働の成果（剰余労働時間＝自由時間＝富）と教育との結合としての教育機会の拡大である。第二の部分は、労働そのものからの疎外の回復にかかわるもので、さらに二つの側面から成る。第一の側面は、生産的労働の技術的過程と教授＝学習過程の結合である。教授＝学習過程と結合される技術的過程の価値実体は、技術的過程における精神労働と肉体労働の対立、すなわち頭脳労働と手労働の対立を反映した知識（知育）と技能（体育）の

(1) スターリン、「レーニン主義の諸問題によせて」、全集、大月版、第8巻、37頁。

(2) マルクス、「ゴータ綱領批判」、選集、大月版、第6巻、33頁。

(3) レーニン、「プロレタリア革命と背教者カウツキー」、全集、大月版、第28巻、249頁。

(4) レーニン、「国家と革命」、全集、大月版、第25巻、444頁。

対立を止揚するものとしての技術であり、その理論的母胎としての弁証法的史的唯物論の立場に立つ科学である。この価値実体としての技術および科学と、機能としての教授＝学習過程とが重疊的に結合されたものが、総合技術教育である。第二の側面は、生産的労働の組織的過程と訓育＝創造過程との結合である。訓育＝創造過程と結合される組織的過程の価値実体は、組織的過程における精神労働と肉体労働の対立、すなわち指揮労働と被指揮労働の対立を反映した管理・監督能力(指導)と協働能力(服務)の対立を止揚するものとしての規律であり、その組織的母胎としての民主集中制を組織原則とする団結である。この価値実体としての規律と団結と、機能としての訓育＝創造過程とが重疊的に結合されたものが、集団主義教育である。このように総合技術教育と集団主義教育は、価値概念と機能概念の統一であるがゆえに、教育目的(内容)原理としての、とともに教育方法原理としての有効性をもつものである。

教育機会の拡大、総合技術教育および集団主義教育の三者は、対立しつつ統一され相互に補完しあって、教育と生産的労働の結合原則を構成しているのである。⁽¹⁾

以上のような重疊的構造として把握される、教育と生産的労働の結合原則が、過渡期における新経済政策の進展とプロレタリアートの独裁の三つの役割とのかかわりあいの中で、過渡期の教育原則としてどのように内実化され、豊富化されつつ新たな教育法則を生みだしてゆくかをみるのが小論の意図である。そのさい分析の具体的事象としてはソ連邦における労農予備校(Рабочий Факультет=Рабфак)をとり上げる。その理由は、第一に、労農予備校が過渡期とともに発生・発展・消滅した教育機関であること、第二に、Рабфакの定訳すらまだないほどにわが国のソビエト教育史研究において完全に未開拓な分野であること、第三に、労農予備校が、後に述べるように初等・中等教育からも高等教育からもはみでている上、すでに消滅したものであるが故に、ソ連邦における初等・中等教育史研究者からも、高等教育史研究者からも研究対象として正しくとりあげられず、筆者の知るかぎり、いまだ発生から消滅までを体系的に研究がなされていないということによる。⁽²⁾ 第四に、労農予備校を分析することにより、ソ連邦における社会主義建設達成の時期区分をめぐる問題に教育の分野から一つの実証素材を提起できるのではなかろうかと考えたことによる。

なお、労農予備校が労働者、農民の教育機会の拡大を主要な任務としていたことから、

(1) なお、この結合構造についての詳細は、拙稿、「資本主義社会における教育と生産的労働の結合」(『現代教育科学』、明治図書、1962、No. 53, 54. 1963、No. 56)及び、広川、竹田稿「教育機会均等、総合技術教育、集団主義教育」(日本唯物論研究会編、「唯物論研究」、1962、No. 10)参照。

(2) (イ) Ф. Ф. Королев, «Очерки по истории советской школы и педагогики 1917-1920», Изд. АПН. РСФСР. 1958. (ロ) Ф. Ф. Королев, Т. А. Корнейчик, З. И. Равкин, «Очерки по истории советской школы и педагогики 1921-1931», Изд. АПН. РСФСР, 1961. (ハ) З. И. Равкин, «Советская школа в период восстановления народного хозяйства 1921-1925 гг.», Гос. уч.-пед. изд. Минист. Прос. РСФСР. 1959. (ニ) Ф. Ф. Королев, «Советская школа в период социалистической индустриализации», Гос. уч.-пед. изд. Минист. Прос. РСФСР. 1959. (ホ) М. Е. Шильникова, «Учебно-воспитательная работа школы в 1930-1934 годах», Гос. уч.-пед. изд. Минист. Прос. РСФСР. 1959. 最近になって、コロリヨーフ教授を中心に、ソ連邦におけるソビエト教育史研究の成果が上にあげたように次々と発表されているが、これらのうち、労農予備校については(イ)が1920年まで多少ふれている他はほとんどとり上げられていない。

さきに述べた教育と生産的労働の結合構造のうち、教育機会の拡大にかんする部分をすなわち、近代の教育価値としての「教育機会の均等理念」が、まさに、資本主義から社会主義への過渡期という現代の中でいかに内実化されてゆくかという問題を中心に分析をすすめてゆくことにする。

I ソビエト政権初期の教育政策の矛盾

ソビエト政権の初代教育人民委員、ルナチャルスキー（A. В. Луначарский, 1875年生, 1633年没, 1917年—1929年まで教育人民委員=文部大臣）は、十月革命の四日後（1917. 10. 29.）に「住民への呼びかけ」《Обращение к населению》を発表した。⁽¹⁾ 「住民への呼びかけ」は、これまでソ連邦におけるソビエト教育史研究において、「自由主義的」であるとしてあまりかえりみられなかったものであるが、この中に示されている、文盲撲滅、教授=学習過程における学習の側における主体的能動性の重視、教員大衆をソビエト権力に引きつけるための具体的方策、国民教育の分野における新しい諸機関の確立などの積極的な側面は正しく評価されなければならない、とくに、文盲撲滅については、「普通義務無償教育の要求に応じた学校網の組織化によって、もっとも短期間に普通の読み書きを可能とすることを、ソビエト政権の第一の目標とする」と述べ重視している。文盲撲滅を第一の目標にあげたことは、革命前ロシアが、「中位」に発達した資本主義国であり、かつ、権力が十月革命直前までブルジョアジー（資本制）とツァーリ（封建制）の癒着によって維持されていたため、教育制度および内容に階級制とともに身分制が温存され、初等義務教育すら導入されなかったことにより、労働者、農民の一般的文化水準が極度に低かったという特殊性への正しい配慮といえる。

しかし、社会主義建設は労働者、農民の一般的文化水準、読み書き能力の向上を不可欠とするのみならず、さらに、ブルジョア専門家以上の技術と規律を身につけた労働者、農民のカードル（基幹要員）を必要とする。このため、教育機会の量的、質的拡大は初等教育のみならず、中等および高等教育においておこなわれなければならない。これについては、「住民への呼びかけ」の中でつぎのように述べられている。「理想、それは——すべての市民にとって平等で、できる限りより高い教育なのである。その理想がすべてのものにとって実現されないかぎりには大学にいたるまでのあらゆる段階にしたがって自然な進学——最高の段階への進学はもっぱら生徒の才能によってなされ、生徒の家庭の富裕の程度にはすこしもよらないでなされなければならない」（傍点は筆者）。もっぱら生徒の才能により、生徒の家庭の富裕の程度によらない「自然な進学」——これは、(1) たしかに教育機会の封建制と資本制の否定、身分制と階級制の否定であり、(2) 「能力に応じて与えられる」社会主義的原則の提示という積極的な点をもっているが、しかし、一方これは、(1) 資本制と封建制が癒着していたがゆえに、敵階級が広範に存在し、激烈に反

(1) Ф. Ф. Королев, «Очерки по истории советской школы и педагогики 1917–1920». Изд. АПН. РСФСР 1958. стр. 89–90. 「住民への呼びかけ」の内容は (1) 国民教育について (2) 教育活動の一般的方向 (3) 教授と学習について (4) 地方分権 (5) 国民教育にかんする国家委員会 (6) 教育者と社会 (7) 憲法制定会議 (8) 省、に分れており、邦訳全文は、カラシニコフ著、福井研介訳、「ソビエトの教育」、岩崎書店、1953、77–82頁。

抗している過渡期の現実を甘くみるものであり、かつ、(2) 労働者、農民大衆およびその子弟が、これまで自らの生産的労働の成果から疎外されていた結果として、その能力において不平等な「遺産」を受けついでいたということにたいする階級的配慮が欠けていたといえる。過渡期においては、「人民大衆の利益を守る労働者と農民の政府は、学校の階級的性格を打破し、学校の全段階を住民のすべての階層にとって入学できるものとしなければならない」⁽¹⁾ のではなく、プロレタリアートの立場に立ち「学校の階級的性格を強固にし、学校の全段階を住民のすべての階層にとって入学できるものとしてはならない」⁽²⁾ ののである。

教育機会の拡大におけるプロレタリア階級性を、カードル養成の任務をもつ高等教育に貫徹したのが、1918年8月2日に承認された人民委員会議（政府）の「大学高専への入学規則にかんする」（О правилах приема в высшие учебные заведения）決定であった。

「国籍や性にかかわらず、16歳以上のすべての人は、卒業証書や、無試験採用証明書、あるいは中学校やその他の学校の修了証明書の提示なしで好きな大学高専の聴講生になることができる。…共和国の大学における授業料の徴収を廃止する。」⁽³⁾ 「人民委員会議は、大学高専への入学志望者の数が通常の欠員の数をこえるばあいに、志望者の全員のために勉学の機会を保障する、緊急な措置をめざし、また有産階級のどんな特権も——法規上のものばかりでなく実際上のものも——ありえないようにすることをめざして、即時一連の決定と措置を準備することを、教育人民委員部に委嘱する。プロレタリアートと貧農の出身者が無条件に第一番に採用されなければならないし、彼らに広範に奨学金があたえられるであろう。」⁽³⁾

当時、「八月の布告」と呼ばれていたこの決定によって歴史上はじめて労働者、農民大衆に大学の門戸が「無条件に」開放され、国内戦と干渉戦の困難な諸条件の中で、新学期とともに各地の大学は労働者、農民であふれた。⁽⁴⁾ 「……いっきよに、学生数は予想をこえるほどに増加した。飢餓がおそい、講義室は寒さにこごえるほどであった。しかし、長椅子は最後の空席までうめられ、研究室は幾重にも包囲された。……しかし、積極的に大学に入学した者の大部分は、諸学科——ことに自然科学、哲学、歴史学のコースの講義をほとんど理解することができなかった。専門技術的コースや実験を必要とするコースでは、一定の普通教育の知識が要求されるが、入学した労働者や農民は必要な基礎知識を、ほとんど身につけておらず、身につけているものといえば、聴講態度の

(1) Н. К. Крупская, «К вопросу о социалистической школе», в журн. «Народное просвещение», 1918, № 1-2 («Н. К. Крупская педагогические сочинения», т. II, 1958, стр. 10.).

(2) Сб. декретов и постановлений рабоче-крестьянского правительства, вып. 1. Изд. НКП, 1918, стр. 57. (К. Т. Галкин, «Высшее образование и подготовка научных кадров в СССР», Гос. Изд. «Советская Наука» 1958, стр. 78.)

(3) Ленин, «О приеме в высшие учебные заведения РСФСР», 1918. («Ленин о народном образовании», изд. АПН. РСФСР, 1957, стр. 248).

(4) А. С. Бутягин, Ю. А. Салтанов, «Университетское образование в СССР», Изд. МУ 1957, стр. 52.

まじめさだけであった。」⁽¹⁾

「八月の布告」によって大学にさっとうした労働者、農民大衆は、上に述べた基礎学力の不足と、大学の講義内容における非現実性および生産的労働からの遊離にたいする失望とで、次第に大学を去っていった。かくして、「八月の布告」によって現実的な利益を得たのは、小ブルジョア知識人たちとそのタマゴたちであった。かれらは、大学へ続々と流れ込み、『自治派』の学生達の強固な核の中に急速にとけこんでいった。⁽²⁾小ブルジョアジーの増大は、当時における「社会主義のおもな敵」が「小ブルジョア的な経済的諸条件と小ブルジョア的な自然発生性」⁽³⁾であったことを考えあわせると、ソビエト政権にとって非常に危険なものであり、高等教育における敵対的矛盾の激化をひきおこした。

「八月の布告」は、大学高専への入学におけるプロレタリアートと貧農の優先を提示し、教育機会の拡大においてはじめてプロレタリア階級性を貫ぬいたのであるが、それを保障する「一連の決定と措置」を教育人民委員部に「委嘱」したことにより、直ちに初期の目的を達することができず、「一連の決定と措置」の実効をみることなく、高等教育における敵対的矛盾の激化をもたらすこととなった。

教育人民委員部の「一連の決定と措置」は、「八月の決定」の二カ月後(1918.10.16.)に「単一労働学校令」(「学校令」; О единой трудовой школе)と「単一労働学校の基本原則」(「宣言」; Основной принцип единой трудовой школы)として最初の実を結んだ。二つの文書は、教育人民委員部の系統的な準備と大衆討議を経てできあがったものだけに、教育機会の拡大におけるプロレタリア階級性を貫き、総合技術教育と集団主義教育を中心にすすめるなど、教育の分野における革命前の「遺産」の打破と継承にもとづき、社会主義教育への路線を提示している。⁽⁴⁾

しかし、「学校令」が示している9カ年の普通義務無償の単一労働学校(8歳から13歳までの第1科と、13歳から17歳までの第2科)がプロレタリア化され、ここからプロレタリアートや貧農が大学高専へ進む時期がくるまで、高等教育のプロレタリア化をおきざりにしておくことはできない。

以上のようなソビエト政権初期の教育政策の積極的側面を発展させ、欠陥を克服していったのは、ほかならぬ人民大衆の創造的学習活動であった。

Ⅱ 人民大衆の創造性と労働予備校の発生

1) 学習サークルの発生とその要因

「八月の布告」がだされた年、1918年の秋に労働者を大学高専へ準備するサークルの

(1) L. Volpicelli, «L'évolution de la Pédagogie soviétique». Delachaux et Niestlé S. A. 1954. p. 47-48.

(2) Н. В. Вихрев, «Рабочие факультеты к десятилетию Октября», Госизд. 1927, стр. 5.

(3) レーニン, 「食糧税について」, 全集, 大月版, 第32巻, 355頁.

(4) この二つの文書については、わが国においてもすでに、矢川徳光氏、駒林邦男氏、坂元忠芳氏他によってとりあげられているので詳述はさける。ただ、この二つの文書を、これまでのソ連邦における教育史研究のように「1931年の決定」の立場からのみ評価するのではなく、二つの文書が古い教育を打破する上で果たした役割および、教育と生産的労働の結合の観点から再評価しなければならない。

プロレタリアートの独裁と過渡期の教育

最初の実践があらわれた。(1) 学習サークルはモスクワを中心にして生れたが、その後、スモレンスクその他にも広がった。(2) ヴィヒリョフ (Н. В. Вихирев) によれば、学習サークルはつぎのような性格をもっていた。(3)

- (1) 学習サークルは、労働者と農民を大学高専へ準備することを目的とする。
- (2) 学習サークルは、地区全体にも、工場や事業所にもおく。
- (3) 学習サークルには、16歳以上の人が入る。さらに、長年働いていた人や、労働組合、工場委員会、貧農委員会、党細胞によって推薦された人は優先的に入れる。

学習サークルにたいして、各労働組合は物質的な面で積極的に援助した。学習サークルやクラブには、「その経営のなかで、もっとも良い部屋か、あるいはかつての工場主の住宅や別荘を使用させた。労働者は、天にも地にも、今度はじめて文化を吸収する可能性を獲得した。したがってむさぼるように知識を求めた」(4)

これらの学習サークルには、年中いつでも入ることができた。学習サークルの模範的な教科プランはつぎのようなものである。

教 科 目	昼 間	夜 間
数 学	12 時間	9 時間
物 理 と 化 学	8 〃	6 〃
製 図	4 〃	4 〃
図 画	2 〃	2 〃
科 学 の 応 用	6 〃	3 〃
計	32 〃	24 〃

このような学習サークルを生みだした要因は何んであろうか？

第一は、変革期にもっとも強く発揮される人民大衆の創造性＝自発的能動性である。

「革命は、抑圧され搾取されているものの祝祭日である。人民大衆が、革命の時期ほど新しい社会制度の積極的な創造者として立ち現われることのできる時はけっしてない」(5)のであり、革命の時期に人民大衆は奇蹟とみえることをやりとげるのである。矛盾が顕在化し、対立物が明確になり、克服すべき敵が明らかになったときに人民大衆は大きな力を生み出す。

第二は、大学開放とともに「長椅子に腰かけた労働者、農民」は、基礎学力の不足を身をもって感じたのであるが、この矛盾の解決について、中等教育をはじめ既存の教育機関に援助を求めることができなかつたことである。当時の中学校はいまだブルジョアと小ブルジョアジーの子弟が大勢を占めていたし、何よりも悪いことに小、中学校の教師は反革命ストライキを起し (1917. 12. 2—1918. 3. 11)、憲法制定議会の選挙には、生徒を通して親に立憲民主^{カデット}党への投票を依頼するほどなので、とてもかれらをあてにすることはできなかつた。(6) 当時、大部分の教師が加盟していた唯一の教員組織、全ロシア教員同盟が金融機関の援助の下に行なつた四カ月にわたる反革命ストライキは、新し

(1) Н. В. Вихирев, Там же, стр. 5.
 (2) К. Яковлев, «История Смоленского рабфака», в кн. «Рабочий факультет Смоленского государственного педагогического университета», Смоленск, 1922, стр. 24.
 (3) Н. В. Вихирев, там же, стр. 5-6.
 (4) マルコフ著, 山下竜三訳, 「ソヴェト労働組合運動史」, 青木書店, 1955. 157頁
 (5) レーニン, 「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」, 全集, 大月版, 第9巻, 106頁.
 (6) «Н. К. Крупская, педагогические сочинения в 10 томах», Т. II, Изд. АПН. 1958, стр. 56-57.

い学校建設に大きな損害を与えたが、一方では、これによって労働者、農民が教育の問題に大きな関心をもつことになり、教育事業への参加が一層積極的になった側面を見落してはならない。

第三は、革命前における反体制教育運動の豊かな遺産の存在である。革命前ロシアのきびしい弾圧の中で、先進的な知識人と労働者、農民が一体となって、下からの人民の力で組織し、発展させた日曜学校や民衆大学、労働者サークルの遺産が再び新しい内容をもってほりおこされてきたのである。たとえば、1919年に創設された、モスクワ大学附属ブハーリン名称労農予備校は、ロシア共和国でも古いものの一つであるが、これは1897年につくられていた、プレチステンスキー労働者サークルを基礎にして創設されたものである。⁽¹⁾

第四は、プロレタリアートが権力を握ったことにより、人民と権力との間の矛盾が革命前の敵対的矛盾から非敵対的矛盾に転化し、権力が人民の自発的な学習活動を革命前のようにきびしく弾圧するのではなく、逆に積極的な援助を与えるようになったことである。ルナチャルスキーは、さきあげた「住民への呼びかけ」の中でつぎのように述べている。「学習は創造的な過程である。……ロシアのいたるところ、とくに都市の労働者の間、また同様に農民の間に、力強い文化・啓蒙の動きの波が起り、こうした種類の労働者や兵士の組織が数かぎりなく増大している。これをたすけ、あらゆる方法でこれを支持し、その前途によこたわる妨害をとりのぞくことは、革命的な、人民の政府が国民教育の領域でおこなうまず第一の課題なのである。」教育人民委員部は、1919年1月1日の会議で、学習サークルの重要性を認め、モスクワにさらに13サークル開くことを決め、学習サークルを積極的に育成し、援助した。⁽²⁾

2) 学習サークルの労農予備校への発展過程

学習サークルの発生は、人民大衆の自発的能動性によって、「住民への呼びかけ」に示された人民大衆の低い文化水準への正しい配慮と、「八月の布告」に示された教育機会の拡大におけるプロレタリア階級性の貫徹というソビエト政権初期の教育政策の積極的側面を継承、発展させるとともに、教育政策のもつ矛盾克服の方途を示したといえる。すなわち、過渡期の教育の普遍性とソ連邦における特殊性の統一の結果にほかならない。

しかし、学習サークルの発生による矛盾の統一も、一時的、条件的、相対的なものであった。

1918年秋から1919年1月までの学習サークルの実践は、学習サークルと大学高専の両者において矛盾の派生と激化をもたらした。サークル側についていえば、教授＝学習内容の水準が低く、大学ですぐ講義を聴けるだけ十分なものでなかった。この矛盾の主

(1) Сборник статей под редакцией К.И. Былинского, «Лабораторный план в практике работы рабфака им. Н.И. Бухарина при 2 МГУ», Госизд Нарком-прос. РСФСР 1929, стр. 3.

(2) Под ред. И. А. Каирова, Н. К. Гончарова, Н. А. Константинова, Ф. Ф. Королева, М. П. Малышева, Б. З. Смирнова, «Народное Образование в СССР», АПН. 1959, стр. 385.

プロレタリアートの独裁と過渡期の教育

たる側面は、学習の側における内在度や能動性の低さにあったというよりは、教授の側における指導者の不足と水準の低さにあったといえる。さらに、教室や机などの物的資材の不足もあげなければならない。一方、大学側についていえば、労働者、農民が学外での学習に移ったため、すでに述べたように教授や学生の中のメンシェヴィキーやエス・エル、小ブルジョア知識人など『自治派』が一層増大し、学内に反革命的空気が強くなったことである。「当時、団結してはいたが少数だった共産主義的學生は、ソビエト政權にたいして敵意ある態度をとっていた当時のすべての學生大衆の中で、小さな島のように見えなくなりつつあった。共産主義的學生とその他の學生大衆との闘争は、生きるか死ぬかの必死の闘いであった。闘争の直接的ねらいは、學生の代表機関、代議員会^{スタート}であった。代議員会は、普通平等直接無記名投票かその他の投票によって選挙されたが、このような選挙制度によっては、共産黨員は、一人の候補者も代議員の中に送りこむことができなかった。」⁽¹⁾

労働者、農民の中から急速にカードルを生みださなければならなかった当時として、このような状況は非常に危険なものであった。学習サークルと大学における両者の矛盾を同時に統一したのが、学習サークルの大学附設であった。学習サークルの大学附設は大学における先進的學生の階級闘争と労働者大衆の学習への能動性が結合され、生みだされたものである。最初の労農予備校はモスクワのザムスクボレーチェ地区の先進的學生の訴えと、それに呼応して大学にかけつけた労働者の統一的闘いによってかちとられた。「大学高専へ労働者を準備するサークルを、大学内部へ移す考えは共産主義的學生の中から生まれた。……ザムスクボレーチェの共産主義的學生グループは、ミヒェリソン、ツインデリ、ブカルカの労働者に訴えることを決めた。ミヒェリソンの人たち、ツインデリの人たち、発電所の労働者たちは、ぞくぞくと大学に押しよせ、『八月の布告』にもとづき、労働者を學生として登録し、聴講カードを与えさせた。」⁽²⁾かくして、「ザムスクボレーチェの金属工場と電気工場の1,000人の労働者は、商科大学となった大コメルチェスク大学の學生と認められるようになった。」⁽³⁾

學生の代議員は、労働者の投票によって大部分が共産主義的代議員となり、労働者學生の最初の集会でつぎのことがきめられた。⁽⁴⁾

(1) 新しい労働者學生は、あらゆる点において古い學生と平等な権利をもつこと、この問題においていかなる譲歩もありえない。

(2) 極く短期間に教授会が新しい聴講生のために、具体的な授業計画をつくることを請願する。

(3) 労働者のために特別に組織された科を労農予備校(Рабочий факультет)と名づける。

刷新された代議員の代表は教授との最初の交渉で、労農予備校の組織にかんし二つの基本原則を提示した。第一に、労農予備校は他の二つの学部^{ファкультет}の全ての権利を享有し、そ

(1) Н. В. Вихрев, там же, стр. 6.

(2) Там же, стр. 6-7.

(3) Ф. Ф. Королев, там же, стр. 401.

(4) Н. В. Вихрев, там же, стр. 7.

の学生は大学の全機関に参加すること。第二に、労農予備校は、他の学部と異なり、集団的方法によって管理される。かつ管理機関の中にプロレタリアート組織の代表者が入ること。

このような労働者学生の要求にたいして、全ての仕事を以前のサークルにまかせようとする、さまざまな教授の『修正』意見が出されたが、共産主義的代議員の代表は、「われわれは労働者サークルを組織しているのではなく、われわれは大学を獲得しようとしているのである」と答えて『修正』をしりぞけた。また、教育人民委員部も労働者学生の意見を支持し、生れたばかりの労農予備校のために特別な教科プランをつくる教授委員会を指導した。

学習サークルの労農予備校への発展過程において、すでに、労働者大衆の創意性と能動性が、人民のものとなった権力によって直接、間接に支持されていたのである。直接的には教育人民委員部の援助と指導であり、間接的には『八月の布告』であった。すなわち、学習サークルの労農予備校への発展・転化は、労働者大衆の先進性、能動性、創意性が人民の権力の援助と指導とに結合されたことによって発現したのである。また、学習サークルの労農予備校への発展過程において、労働者大衆の能動性と創意性が労農予備校の「管理」に労働者学生を参与させること、および管理が集団主義的方法によって行なわれることを基本原則として要求しているが、これは、教育機会の拡大と集団主義教育との結合の要求としてとくに注意しておかなければならない。

これらの意味において、まさに、労農予備校は、十月革命の“落し子”であったといえる。

先進的な学生と呼応した労働者学生によってかちとられた最初の労農予備校は、モスクワ商科大学（現在のプレハーノフ名称経済大学）に附属して、1919年2月2日に開設された。⁽¹⁾

3) 労農予備校の法制化

モスクワ商科大学は、労農予備校の附設によってこれまでの凍りついた大学の生活が文字通り生き生きとよみがえった。教育人民委員部は、この最初の労農予備校を例として、1919年5月23日に、「労農予備校設立専門委員会の作成した計画にもとづいて、モスクワ交通工科大学附属学農予備校を設立すること」⁽²⁾を決定した。

1919年9月11日に、モスクワ大学に附属していた学習サークルが、労農予備校に改組されたが、ちょうど、その日に、教育人民委員部は、国の全ての大学に附属労農予備校を組織する義務的な決定を公布し「全ての大学高専に11月1日までに労農予備校を開

(1) «Педагогический словарь», Академия педагогических наук РСФСР, 1960. том 2, стр. 245-246. Н. М. Катунцев, «Рабочие факультеты—основной тип общеобразовательной советской школы», Советская Педагогика (=С. П.), 1957. № 9. стр. 72-81. А. С. Бутягин, Ю. А. Салтанов, «Университетское образование в СССР», 1957. Изд. МГУ. стр. 53. Н. В. Вихирев, там же. Ф. Ф. Королев, там же.

(2) Постановление Наркомпроса «Об организации рабочих факультетов при университетах», 11 сентября 1919. (Н. В. Вихирев, там же. «Материалы к летописи по народному образованию», Приложение к журналу „Народное Образование“ № 2. 1958. стр. 14)

設することを義務づけた。」⁽¹⁾ 労働者と農民を極く短期間に大学へ準備することを労農予備校の目的としたこの決定は、同時に最初の労農予備校の実践にもとづいて、つぎの原則を確定した。⁽²⁾

第一に、労農予備校は、大学諸機関への参加、施設の利用、授業編成などにおいて、他の諸学部と完全に平等な権利をもつこと。

第二に、労農予備校評議会の構成に、集団管理の考えを反映させ、そこには聴講生と教官とともにその地方の労働者組織の代表者を加えること。

これらの原則には、学習サークルから労農予備校へ発展する過程で労働者学生が教授会に提起した諸要求が明確に反映していた。教育人民委員部の決定によって、1919年9月23日に正式に開設されたスモレンスコエ労農予備校⁽³⁾をはじめ、つぎつぎと労農予備校が開設され、1919年末には14の労農予備校が存在した。

1919年9月11日の労農予備校附設に関する教育人民委員部の決定は、労農予備校の歴史にとってのみならず、教育制度全般にわたって解明されるべき新たな問題を提起したという点でその意義は大きい。学習サークルという人民大衆の下からのインフォーマルな教育活動が、ここにはじめてフォーマルな教育制度として位置づけられたのである。これによって、人民大衆の創造性、能動性が教育の分野において一層不可欠なものであるとともにさらに発展させられ、有効な力となりうる現実的基盤の存在が示されたのである。

その後、さらに一カ年の実践に基礎をおいて、1920年9月17日に、人民委員会議の「労農予備校について」⁽⁴⁾の布告によって、一層強固な法的承認をうけた。『八月の布告』が出されてちょうど2年目に、当時、人民委員会議が『八月の布告』の中で述べた大学プロレタリア化に必要な「一連の措置」として、人民大衆の創意によって生みだされた労農予備校が、人民委員会議それ自身によってもっとも確固とした承認を得たのである。

1920年12月から1921年1月まで開かれた「国民教育の問題にかんする第一回党協議会」は、九項目の決定を採択したが、そのうちの二項目、『労農予備校について』はつぎのように述べている。⁽⁵⁾

「1) 労農予備校の基本的任務は、労働者と農民を上級学校へ準備することである。

(1) Н. В. Вихрев, там же.

(2) 「労農予備校は、諸学部の全ての権利を享有し、大学高専の全ての団体や指導機関に自分たちの代表をもつこと(第2条)。大学高専は、教室の割当てや授業時間表の作成のさいに、教室や事務室、実験室、実習室にたいする労農予備校の要求を満足させなければならない。また、労農予備校の活動の一層広汎な発展を保障し、重要な授業編成の完全な可能性を与えるほどに施設を自由に使用すること(第4条)。労農予備校の聴講生は、大学高専の学生の全ての権利を享有し、社会的保障をうける(第11条)。」(Там же. стр. 8-9.)

(3) К. Яковлев, «История Смоленского Рабфака», в. кн; «Рабочий факультет Смоленского государственного педагогического университета», Смоленск. 1922. стр. 24.

(4) «О рабочих факультетах», (Н. В. Вихрев. там же. стр. 9.)

(5) «О рабочих факультетах — Первое партинное совещание по вопросам народного образования, декабрь 1920г., — январь 1921г.», («Директивы ВКП (б) по вопросам просвещения», Народный комиссариат просвещения РСФСР, ОГИЗ, 1931, стр. 354-355.)

2) 準備は、労働者の職業的＝技術的知識を利用してもっとも短期間に与えられなければならない。

3) 労農予備校は、大学高専の有機的部分となり、大学高専に附属して建てられ、上級学校プロレタリア化の道具となる。

4) 労働組合は、全ソ連邦労働組合中央評議会が最高国民経済会議と職業教育監督局とともに作成した割当に応じて、生産での仕事を完全に解放して聴講生の一定数を労農予備校へ送りこむこと。

5) 党委員会は、労働組合会議の同意を得て労農予備校の主任を選抜し、労農予備校における政治教育活動を積極的に指導する。

6) 教育人民委員部に必要なことは、現存する労農予備校の強化と大学高専や高等工業学校や最近開かれた中等技術学校に附属した新しい労農予備校の開設に真剣な注意をむけることである。労農予備校の建設は、教育人民委員部の緊急な課題と認める。」

このようにはじめは学習サークルとして人民大衆によってつくられた(1918. 秋) 労農予備校は、学生と労働者の闘いによって大学高専に附設され(1919. 2. 2.)、教育人民委員部(文部省)によって教育制度の中に明確に位置づけられた(1919. 9. 11.)。その後、人民委員会(政府)によって一層強固な法的承認を与えられ(1920. 9. 17.)、さらに、党の教育政策の重要な一項に加えられた(1920. 12. —1921. 1.)のである。これより先、1919年3月に決定された党綱領の教育条項にも、学習サークルおよび労農予備校の実践が反映されるとともに、綱領によってその後の発展の基本的見通が与えられた。「プロレタリアートの独裁の時期、すなわち、共産主義の完全な実現を可能とする条件の準備期において、学校は一般に共産主義の諸原則の手引者であるばかりでなく、共産主義を終局的に確立する能力ある世代の教育のために、勤労大衆の半プロレタリア層と非プロレタリア層への、プロレタリアートの思想的、組織的、教育的影響の手引者でなければならない。」⁽¹⁾

ところで労農予備校の発生については、メディンスキー教授(Е. Н. Медынский)、コンスタンチノフ教授(Н. А. Константинов)、シャバエバ教授(М. Ф. Шабеева)共著の「教育史」(《История педагогики》, 1956.)と、コンスタンチノフ教授編集、「教育史概説」(《Очерки по истории педагогики》, 1952.)はともに発生を「1920年」としているが、これは学習サークルの発生(1918. 秋)はもちろんのこと、最初の労農予備校開設(1919. 2. 2.)も教育人民委員部の決定(1919. 9. 11.)も見落している。駒林邦男助教授もまた、『ソ連邦における社会主義教育の発展』(海後勝雄編、「社会主義教育の思想と現実」, お茶水書房, 1959.)において、教育人民委員部の決定(1919. 9. 11.)を見ていない。逆に、ハンス教授(N. Hans)はその著「比較教育」(「Comparative education」, London, 1950.)において、「ソビエト政府は、1918年に労農予備校を新設した」(p. 315)と、まだ、インフォーマルな学習サークル段階の1918年をとり上げている。すでにみて

(1) 《Хрестматия по истории педагогики》, Учпедгиз, 1957. стр. 448. 「勤労住民を教育事業に積極的に参加させること(第6項). 労働者と農民の独学と自己発達を、全面的国家的に援助すること(第7項). すべての好学者にたいして、何よりもまず労働者にたいして、上級学校の講義の聴講を広く開放すること(第9項).」

プロレタリアートの独裁と過渡期の教育

きたように、労農予備校の発生は、1919年2月2日であり、最初の法制化は1919年9月11日付教育人民委員部の決定である。

Ⅲ 復興期から建設期への労農予備校の発展

1) 国民経済の復興期から社会主義建設期へ

1920年10月、ポーランドとの停戦が成立し、国内戦および干渉戦は一応の終結をみたが、当時の国民経済は全分野にわたって崩壊寸前にあった。1913年の低い水準に比較して、1921年に工業生産額は21%、農業生産高は60%にすぎない。⁽¹⁾ さらに、輸送力は五分の一に低下し、燃料危機がおそい、飢餓に直面した。工場労働者は食糧を求めて農村に流れ、工場閉鎖が続出し、⁽²⁾ プロレタリアートの政治的力が相対的に弱まり、農民は、生産性向上の刺戟をうばってしまう食糧徴発制にたいして不満を示しはじめた。この不満が、富農や反革命勢力に利用されて、ウラル、シベリア、クロシュタットで暴動となってあらわれた。⁽³⁾

このような経済的、政治的危機に直面して、1921年3月の第10回党大会は、戦時共産主義から新経済政策への移行を宣言した。新経済政策は、プロレタリア国家が国民経済の管制高地（工業、銀行、輸送、貿易、土地）を握った上で、資本主義を許容するものである。資本主義を許容することによって生産力を高め、農業と工業の取引を通じて両者の結合を深め、社会主義的要素と資本主義的要素との闘争を経て将来に社会主義の勝利を予期するものであり、これが資本主義から社会主義への唯一の正しい道とされた。

「新経済政策の本質はプロレタリアートと農民の同盟である。その本質は、プロレタリアートの前衛と広範な農民大衆との結合にある。ぜひとも、すぐさま、いまずぐになしとげられなければならない生産力の上昇が、新経済政策のおかげではじまっている」⁽⁴⁾

新経済政策期といわれるのは、三つに区分される。ネップ初期は1921—26年の国民経済復興期であり、ネップ中期は、1927—32年の社会主義的再建期、ネップ後期は1933—36年の社会主義完成期であるが、国民経済復興期においては、労農同盟と生産力の発展による社会主義的要素の前進を一層強固なものにするために、政治的上部構造においてはプロレタリアートの独裁の第一の任務、すなわち、敵階級の抑圧の面が前面に押しだされる。具体的には、富農の多課税と貧農の免税を含む単一直接農業税（1923年4月）であり、また、雇傭主、個人企業家、旧警察官、旧憲兵などの選挙権剝奪を規定したソ連邦最初の憲法（1924年1月）であった。さらに、入党許可基準も階層別に三つのカテゴリーが設けられ（1922年3月）、労働者と労農出身兵士が優先された。「ソビエト労農共和国では、すべての啓蒙事業のやり方は、一般に政治的啓蒙の分野でも、とくに芸術

(1) Под общей редакцией П. С. Непорожного, «40 лет плана ГОЭЛРО», Гос. энерг. изд. 1960. стр. 357.

(2) А. А. Матюгих, «Рабочий класс СССР в годы восстановления народного хозяйства (1921-1925)», Изд. АН СССР, 1962. стр. 61.

(3) Под ред. А. П. Погребинского, «История народного хозяйства СССР (1917-1959 п.п.)», Гос. изд. 1960. стр. 63.

(4)レーニン「第9回全ロシア・ソヴェト大会」, 全集, 大月版.

の分野でも、プロレタリア独裁の目的を首尾よく実現するため、すなわち、ブルジョアジーを打倒し、階級を廃絶し、人間による人間の搾取をすべて一掃するためのプロレタリアートの階級闘争の精神に貫かれていなければならない。」⁽¹⁾

一国で社会主義の道を進まねばならないという困難な諸条件の中で、1923、24、25年と農業面での、そしてひきつづき工業面での発展がたたかいとられ、⁽²⁾ 農業生産指数は1925年に、工業では1926年にそれぞれ革命前の水準に達し、国民経済の復興期が終り、1926年から、社会主義工業化と農業の全面的集団化をめざす国民経済の建設期へと入ってゆく。とくにこれまでの復興が主として旧式の技術を基礎としておこなわれたのにたいして、建設期には国の電化と結びついた農業をも改造できるような機械制大工業の発展が必要であり、それを駆使できる高い水準の技術と規律を身につけたカードルが必要であった。「1925・26年度に、全工業に補充すべき熟練労働力の需要は、433,000人という数にのぼるのだが、われわれは、この需要のわずか四分の一を供給しうるにすぎない。」⁽³⁾ とくに、1928年におこった「シャフタ事件」は、労働者・農民のなかから生まれ、人民と緊密なつながりをもち、現代の先進的技術を身につけたプロレタリア知識人の養成を急務とした。1928年からはじまった第一次五カ年計画の完遂のために、生産額の社会主義的部分が工業の82.4%にたいして、3.3%ととくに立ち遅れていた農業を集団化し、1929年に建設されたエム・テー・エス（機械トラクター常置所）の全面的利用のために、組織的経営力と高い機械技術を身につけたカードルが必要とされた。1924・25年度に457台だけであった国産トラクターの生産は、1928・29年度には7倍余になったが、⁽⁴⁾ それを使いこなせる技術者が不足していたのである。

「科学を習得し、専門家ポリシェヴィキの新しいカードルを知識のあらゆる部門にわたってきたえあげ、きわめてねばり強く、まなび、まなび、まなぶこと、——これが今のわれわれの任務である。革命的青年が科学のために大衆的行進をおこすこと、——これこそいまわれわれに必要なことである。」⁽⁵⁾

2) 教育機会の質的・量的拡大

現代における教育機会の拡大を分析するばあい、つぎのような分析手続きをとることが必要であると考えられる。まず第一に、教授＝学習過程および訓育＝創造過程の、対立しつつ統一している両側面としての教授と訓育の側面、および、学習と創造の側面にかかわる主体、すなわち教師と学生の両側面の分析。第二に、両側面の質的拡大と量的拡大の分析。第三に、(1)質的拡大にかんしては、採用＝入学基準の発展と教師および学生の社会的構成の変化（階級および階層別）を分析すること。(2)量的拡大にかんしては、教師

(1) レーニン、「プロレタリア文化について」、全集、大月版、第31巻、315頁。

(2) А. П. Молчанова, «Из истории борьбы за упрочение союза рабочего класса и крестьянства», Изд. Академии Наук СССР, 1956, стр. 13-33.

(3) スターリン「ソ同盟共産党（ボ）第14回大会」、全集、大月版、第7巻、322頁。

(4) В. П. Данилов, «Создание материально-технических предпосылок коллективизации сельского хозяйства в СССР», 1957, стр. 287.

(5) スターリン、「ソ同盟レーニン共産青年同盟第8回大会での演説」(1928. 5. 16) 全集、大月版、第11巻、92頁。

プロレタリアートの独裁と過渡期の教育

および学生数（同時に学校数）と学習期間の伸縮を分析すること。第四に、以上の諸分析の夫々にかかわる管理・財政（これについては、組織と教育費、その間接負担か直接負担かなど）の分析。

以上の諸点の分析とその総合を通してはじめて教育機会の拡大の全面を把握しようと考えるが、労農予備校にかんしては、資料的制約および発生の特異性を考慮して学生の側に重点をおいて分析する。

（イ）学生の採用＝入学基準と社会的構成の変化

教育人民委員部の最初の法制化（1919. 9. 11）によって、労農予備校には「16歳以上の工場労働者と『生粋の』農民」が、施設の許すかぎり任意に入学することができた。⁽¹⁾しかし、人民委員会議の決定（1920. 9. 17）が出されるにおよんで、これまで労農予備校の補充を自然発生的、偶然的に行なってきたことが批判され、新しい基準が設けられた。すなわち「労農予備校には、3年以上生産現場で直接肉体労働に参加した18歳以上の労働者と農民が採用される」⁽²⁾ことになった。肉体労働従業年数は、入学希望者の年齢によって4年～6年に引き上げられたり、少数民族の場合は文化的後進性を考慮して1年に下げられたりもしたが、入学希望者は一層増大した。1920年末には労農予備校にかんする新しい法令がだされ、採用＝入学基準の政治性が重視され、労働組合、村ソビエト、貧農委員会、各級党機関、コムソモールなど公的機関の推薦証明を必要とするようになった。⁽³⁾もちろん、過去に利子や他人の労働を搾取することによって生計をたてていたものは入学を許されない。「過去の人々」や「敵性分子の子ども」であるか、「革命の子ども」であるかが決定的な要素となった。一方、知識水準にかんしては、「おおまかな読み書きができ、整数の四則算を知っていて政治的心得があれば充分であった。」⁽⁴⁾

このように労農予備校採用＝入学基準における肉体労働従業者および党派性の一方的重視は、24・25年まで一層強められる。その後採用された入学規則によれば、⁽⁵⁾志願者は一層政治性の強い25の質問——生年月日と場所、革命前後の仕事、革命前後の両親の社会的地位、労働組合員であったかどうか、国内戦中の軍事的行動、党およびソビエトのためにつくしたはたらき、現在および過去において政党员であったかどうか、自分自身および両親の財産所有の如何など——に答えねばならず、これらを審査するため「採用＝入学資格審査委員会」と「奨学金審査委員会」も設けられた。

このような措置によって、労農予備校生の社会的構成は次頁の表にみられるごとく、その発生初期に比較していちじるしい変化をとげた。すなわち、労働者、農民の比率の増大と非肉体労働者の比率の低下、さらに、党员およびコムソモール員の比率の急激な増大が特徴的である。

(1) Королев, там же, стр. 402.

(2) Н. В. Вихрев, там же, стр. 12.

(3) К. Яковлев, там же, стр. 29.

(4) Н. В. Вихрев, там же, стр. 13.

(5) G. S. Counts, «The challenge of soviet education», 1957, p. 148.

労農予備校生の社会的構成⁽¹⁾

		労働者	農民	非肉 労働者	共産党員と コムソモール	非党員
		%	%	%	%	%
昼間 労農予備校	1921年	40	32	28	20	80
	1922年	52	23	25	26	74
	1923年	55	26	19	36	64
	1924年	63	25	12	57	43
	1925年	54	41	5	76	24
	1926年	45	50	5	79	21
夜予 間備 労農校	1923年	72	9	19	55	45
	1924年	78	10	12	68	32
	1925年	77	10	13	73	27
	1926年	76	10	14	76	24

直接的には以上のような社会的構成の発展により、基本的には土台における復興期から建設期への移行に対応して、1925・26年を転換点として、採用＝入学基準における肉体労働および党派性の一方的重視から、知識水準の重視へと変わる。

1924年に教育人民委員部は全労農予備校に指令を送付し、ロシア語、算数、社会的・政治的準備、にかんする採用＝入学基準を上げることが指示した。また、1926年は国の社会主義工業化が始った年であるが、その1月はじめに教育人民委員部は、「労農予備校生の資質向上対策について」という特別決定を採択した。⁽²⁾ 党中央委員会も労農予備校生の知識水準引上げに関心を示し、1926年6月に「大学高専、労農予備校、中等技術学校の入学許可にかんする」回状を送付した。「労農予備校生をきびしく点検することが、労働者、農民の教育水準を上げることになるであろう。すでに労農予備校への採用は、たんに証明書だけでは不十分であり、それとともに専門の試験をうけなければならない。」⁽³⁾ さらに、1927年9月25日、「労農予備校について」の決定を採択し、その中で、中央委員会はつぎのように述べている。「労農予備校は数年のあいだに、労働者、農民青年が大学高専に進学するための基本的パイプとなるであろう。……党中央委員は人民委員会議とロシア共和国教育人民委員部が、労農予備校網の拡大と労農予備校における学習活動のよりよい解決にとって必要な措置をとることを必要と認める」⁽⁴⁾

入学者の知識水準向上のために、労働組合や、労農予備校生が多く援助を行なったが、25年秋ごろから労農予備校に入学するための学習サークル、講習会が各地の工場や職場におこってきたことは特徴的である。25・26年度のはじめに、教育人民委員部職業教育監督局の会議で、「もっとも遅れた労働者グループや、特に僻地の農民、ロシア以外の遅れた民族や基礎学力の不足なものを労農予備校に入れるための講習会を地方に組織することは、目的にかなったことであるしまた必要なことである」⁽⁵⁾ と決定した。こ

(1) Н. В. Вихирев, там же, стр. 13.

(2) «Еженедельник Наркомпроса», 1926. № 5, стр. 97. (Катунцев, там же, стр. 73.)

(3) Архив ЦК ВЛКСМ, д. 8436, 1921-1926.

(4) «О Рабфаках», (Из постановления ЦК ВКП (б), «Директивы ВКП (б) по вопросам просвещения», 1931. РСФСР. стр. 156.)

(5) Архив Министерства просвещения РСФСР, ф. рабфаков 1925-1926, д. 85, св. 2, л. 28. (Н. М. Катунцев, там же).

プロレタリアートの独裁と過渡期の教育

のようないくつかの具体的方策によって、採用＝入学の知識水準が引上げられ、採用者

労農予備校入学者の学歴構成⁽¹⁾ (%)

養成機関	昼間労農予備校		夜間労農予備校	
	1927年	1928年	1927年	1928年
下級第一科学校	28.0	28.0	30.0	26.0
第一科学校	50.0	45.0	40.6	36.0
七年制学校	5.4	4.5	6.0	7.0
農村青年学校	1.5	1.6	0.4	1.5
工場実習学校	5.0	8.0	8.0	13.0
成人夜間講習会	4.0	5.0	10.0	11.5
独学	6.0	7.0	5.0	5.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

の中にこれまでの独学にかわって次第に、第一科学校（五学年）や七年制学校の卒業生の占める割合が増大してきた。

入学者の知識水準の向上とともに、学生の社会的構成における労働者や党員の比率がひきつづき高まり、当時の普通初等・中等教育や中等技術学校と比較してその比率がきわだっていたことを以下の表は示している。

1925・26学年度における労農予備校生の年齢構成は、18—19歳 22.15%，20—25歳 52.36%，25—30歳 20.39%であり、20—25歳が基本的部分となっている。また労農予備校における女子学生の割合は、他の教育施設と比較してもっとも低い。

1928・29年度学生の社会的構成⁽²⁾

	労働者	農民	その他
1～4年	11.2	79.6	10.0
5～7年	28.0	41.0	31.0
8～9年	21.5	41.5	37.0
労農予備校	68.6	27.1	4.3

(ロ) 学生数・学校数および学習期間の伸縮

次頁に示された労農予備校の学生数と学校数の表およびグラフ(85頁参照)から、学生数および学校数の伸縮をつぎの四つの

女子学生の割合⁽³⁾

学 年 度	大学高専	労 農 予 備 校	中 等 技 術 学 校	職 業 技 術 学 校
1927・28	28.9	17.3	53.4	36.4
28・29	29.0	16.6	45.6	31.9
29・30	28.8	19.9	-	-

時期に区分することができる。すなわち、第一期は、発生から1923・24学年度にかけての漸増期。第二期は、24・25学年度から27・28学年度にかけての停滞期。第三期は、28・29学年度から32・33学年度にかけての急増期。第四期は、33・34学年度から40・41学年度にかけての減少消滅期。

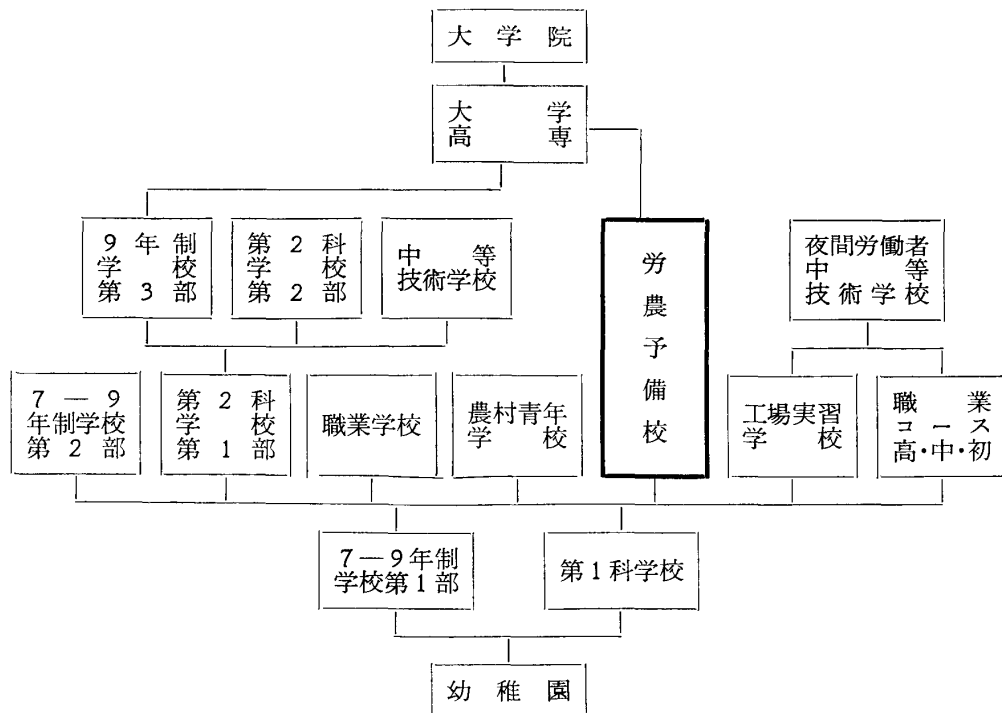
第一の漸増期は、第三の急増期に比較しての“漸増”であって、20・21学年度との比較では23・24学年度までの3年間に学生数、学校数とも2.5倍になっており、漸増期とはいえその拡大テンポは急速であったといえる。この拡大テンポは当時の他の教育諸機関——下級・中級職業教育、中等教育、初等教育、就学前教育施設——が全て学生数と

(1) «Труд» от 9 марта 1929 г. № 57. (Н. М. Катунцев, там же, стр. 74.)

(2) «Народное просвещение в СССР за 1928/29», Наркомпрос РСФСР Госизд 1930, стр. 34-35.

(3) Там же.

1920年代のソビエト教育制度（ロシア共和国）に占める労農予備校の位置⁽¹⁾



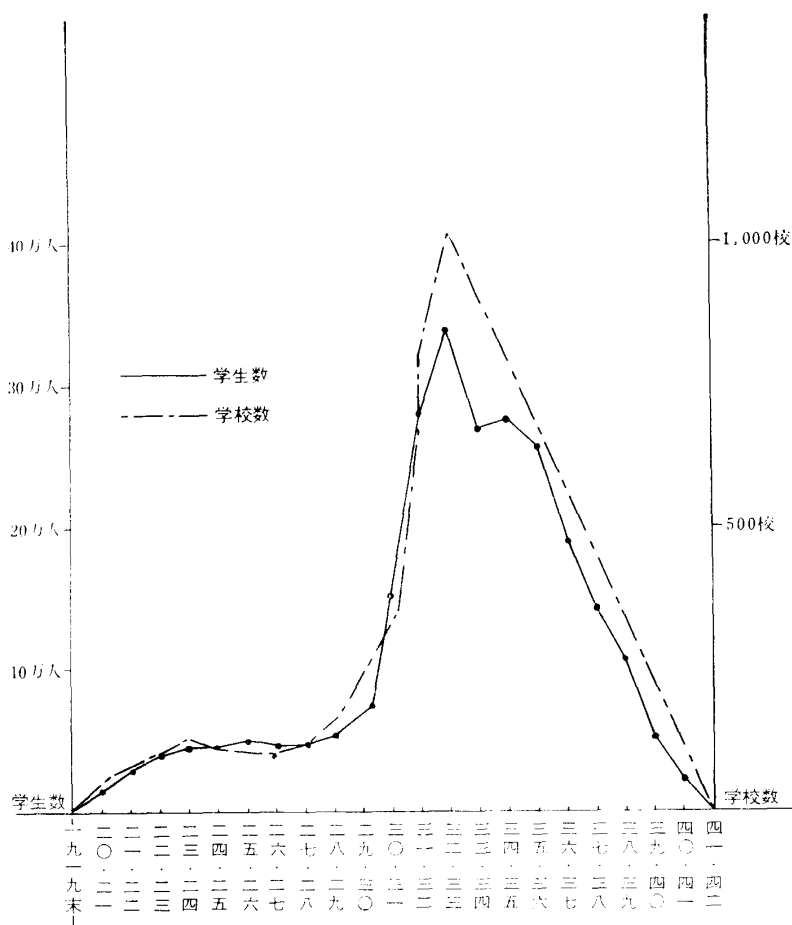
労農予備校の学生数と学校数⁽²⁾

学年度	学生数	学校数	学年度	学生数	学校数	学年度	学生数	学校数
1919 末	2,149	14	1927・28	48,799	122	1935・36	259,000	
20・21	18,005	54	28・29	52,900	164	36・37	195,000	
21・22	27,172	85	29・30	75,000		37・38	143,000	
22・23	39,219	108	30・31	155,000	340	38・39	108,000	
23・24	45,913	130	31・32	285,000	800	39・40	53,000	
24・25	43,322	113	32・33	339,500	1,025	40・41	25,000	
25・26	47,174	108	33・34	271,000		41・42	0	
26・27	45,702	109	34・35	279,000				

も減少している⁽³⁾ことを考えるととくにめざましいものであり、権力をにぎった労働者、

- (1) Г. М. Кржижановский, «Социалистическая реконструкция и культурное строительство», 1928. Изд. Ком. Академии, стр. 19.
- (2) А. В. Луначарский, «Десять лет культурного, строительства в стране рабочих и крестьян», Госизд 1927. стр. 147. Н. В. Вихирев, там же, стр. 10 «Большая Советская Энциклопедия». том 35, стр. 451. М. М. Дейнеко, «40 лет народного образования в СССР», Гос. уч.-пед. изд. министерства просвещения РСФСР, 1957, стр. 222. «Народное просвещение в СССР за 1928/29», Наркомпрос РСФСР Госизд. 1930. стр. 30. «Cultural progress in the U. S. S. R.», Foreign languages Publishing house, Moscow 1958. p. 83.
- (3) А. В. Луначарский, «Десять лет культурного строительства в стране рабочих и крестьян», Госизд, 1927. стр. 139-144.

この時期における減少が、中等、初等、就学前と低学年になるにしたがって激しいところから、国内戦と干渉戦による一般的な物的資材の欠乏の他に、1918年から22年にかけての発疹チブスの大流行による児童の死亡が原因しているであろう。



農民の学習，創造への意欲の大きいこととソビエト政権の労農予備校建設への熱意を反映しているであろう。第二の停滞期は，復興期から建設期への発展を反映した採用＝入学基準の変化——党派性から専門性——によってもたらされたものである。入学のさいの知識水準の引上げにより，ロシア共和国の労農予備校では，1927年に18,410通出された願書のうち，40%にあたる7,105人しか採用されていない，⁽¹⁾ 第三の急増期における拡大テンポは驚異的なものであり，このような拡大テンポを示した教育機関はソビエト教育の歴史にお

いてすらあとにもさきにも，労農予備校のみである。これは，1927年1月の教育人民委員部の労農予備校生3倍化の決定と，労農予備校や工場に附設された準備講習会の量的質的向上によってもたらされたものである。しかし，一方ではこの急激な拡大の中にすでに消滅への新しい矛盾を内包していたのである。第四の減少消滅期にかんしては後述する。

学習期間の伸縮もほぼ以上の時期区分に対応している。1919年2月，労農予備校となった当初は3カ月間であったが，これでは大学での聴講能力を身につけることは無理であったので，労働者は期間の延長と延長した期間を普通教育にあてることをしつこく要求し，さらに3カ月（電気工学関係は6カ月）延長された。9月に法制化されてからさらに延長されたが統一的ではなく，生物，社会経済部門の2年にたいして，技術部門は3年であったりした。1921年6月に開かれた第1回労農予備校大会で，全部門の修学期間を3年とすることが決定され，9月から実施された。⁽²⁾

その後，復興期の間は3年であったが，建設期に入って新らしく労農予備校に提起された「高い資質をもったカードル養成の準備」という課題を遂行するために期間を延長することが，教育人民委員部職業教育監督局で決定され，シュミット(O. Ю. Шмидт)を

(1) «Труд», от 9 марта 1929 г., № 57. (Н. М. Катунцев, там же.).

(2) Ф. Ф. Королев, там же.

議長とする特別委員会が設けられた。1927年3月のモスクワアカデミー活動家集会で、「労農予備校の活動家の意見が3年の学習期間の欠陥を明らかにしていることに基づいて、昼間労農予備校の学習期間を4カ年に移行することが緊急である」⁽¹⁾と決定され、27年後半から4年制へ移行しはじめた。最終的には、1928年1月15日のロシア共和国人民委員会議の決定によって確認された。

1930年5月16日に、党中央委員会は「労農予備校の改革にかんする」決定を採択したが、その第八項には「昼間労農予備校の学習期間は3年に短縮する。夜間および文化的に遅れた諸民族地区の労農予備校は4年制にすえおくものとする」⁽²⁾と述べられており、ここでふたたび昼間労農予備校は3年制となった。

(ハ) 教師および管理・財政面

教師については、学習サークルのときは職場の党員や活動家はその役割を果たしたが、大学に附設されてからはほとんどは大学の教官が指導にあたった。しかし、政治教育はひきつづき党員が行なった。教師のうち党員の占める割合は、1923・24学年度に10.3%（コムソモールを含めると19%）、1925・26学年度には16%であったが、社会科学担当教師は60%が党員であり、また校長は全て党員であった。1926・27学年度に労農予備校教師の総数は約2,560名であったが、当時の学校数は109校、学生数は45,702名であるから、一校平均、教師は23人、教師一人につき平均学生18人となる。また、総数のうち85.6%が大学教官であり、残り14.4%は中学校の教師である。この中には主として、外国語と読み書きの教師と党員＝社会学者がふくまれている。教師のほとんどは男であり、婦人は18.5%にすぎない。⁽³⁾

労農予備校の管理組織については、1919年9月の法制化とともに教育人民委員部の所管となり、その中の職業教育監督局に労農予備校部が設けられ、具体的な管理・指導はここで行なわれた。1930年5月16日付党中央委員会の「労農予備校改革にかんする」決定によって、教育系労農予備校を除いて、全ての労農予備校の管理を教育人民委員部からはずし、各専門に応じておのおのの高等教育機関に所属させ、さらにその高等教育機関はそのもっとも近い各人民委員部に管理されることになった。これによって社会主義建設に伴って必要とされるカードルは、求めるものと養成するものが一体となり労農予備校の一層の発展をもたらした。

教育費について、ビヒリョーフ（Н. В. Вихирев）は1927年当時のことについてつぎのように述べている。⁽⁴⁾ (1) モスクワの労農予備校と他との不平等はまだ残っているとはいえ、一層個々の労農予備校間の均等配分に近づく傾向にある。(2) 賃金のことでは、校長と教員の生活向上に大きな注意がはらわれたが、職員の手当はまだ低いままである。(3) 教育費の支出は年々増大し、労農予備校の教材を急テンポで補充する真の可能性を与えている。(4) 学生の物質的保障（給費金）は、昼間労農予備校生には全部あ

(1) ЦГАОР. ф. 5574. оп. 5, ед. хр. 22, л. 6. (Н. М. Катунцев, там же).

(2) «О перестройке рабфаков», постановление ЦК ВКП (б) от 16/V 1930 г. («Директивы ВКП (б) по вопросам просвещения», Учгиз-наркомпрос РСФСР, 1931. стр. 156-159.).

(3) Н. В. Вихирев, там же, стр. 23-24.

(4) Н. В. Вихирев, там же, стр. 11.

たるが、それでも給費金額はまだ不足している。

労農予備校の予算⁽¹⁾

学 年 度	予算 (ルーブリ)	拡 大 率
1924・25	9,038,806	100%
1925・26	11,397,445	126%
1926・27	12,462,178	137%

3) 教授・訓育過程の内容と方法

(1) 発生期における教育内容の不統一

労農予備校は発生当初、同時に二つの目的をもっていた。すなわち、「一方で、労農予備校は、完成した知識体系を与え、聴講生の中から経済建設の専門分野における活動家になる労働者、すなわち技術者を養成するという独自の課題をもっていた。他方で、労農予備校は、労働者の大学への入学のための準備段階であり、完成した高等教育を受ける準備を目的とした。」⁽²⁾ このように、同時に二つの課題を、3カ月という短期間に果さねばならなかったために、当初の教科プランもプログラムも統一のない複雑なものであった。

はじめ労農予備校は、附設された大学の性格に応じて、経済系労農予備校と技術系労農予備校の二つに大別された。

経済系労農予備校は、労働者に国民経済現象の本質理解を与える課題とともに、労働者を国民経済と国家建設のさまざまな分野での専門活動へ準備する課題をもっていた。教育内容の主要な関心は、社会科学と経済学に向けられていたが、教材は一般課程と専門課程に配分された。専門課程は、はつきりと実践的性格を有し、① 集団化、② 労働者、③ 工業、④ 農業、⑤ 会計・財政の教科をもっていた。技術系労農予備校も二つの性格をもち、一般課程は、数学と物理の科目があり、専門課程は、1) 電気工学課程、2) 化学工学課程、3) 冶金工学課程にわかれていた。

労農予備校の学習期間は、はじめ3カ月であったが、多くの教育内容を身につける必要から労働者学生は学習期間の延長を要求し、すでに述べたように、6カ月になり、9カ月になり、さらに2年あるいは3年となった。

発生後2カ年の経験にもとづいて、1921年、はじめて労農予備校の、最初の統一的教科プランの草案がつくられ、6月の労農予備校第1回活動者大会で承認され、さらに最終的には8月に、教育人民委員部労農予備校部で確認された。⁽³⁾ それとともに労農予備校は三つの部門——物理・数学系、自然科学系、社会・経済学系をもつことになった。教科プランにはつぎのような科目が含まれていた。⁽⁴⁾

1) 数学 (算術, 代数, 幾何, 三角法, 高等数学基礎), 2) ロシア語と文学史, 3) 社会科学 (文化史, ロシア史, 西欧近代史, 政治経済学, ソビエト権力, 史的唯物論, 経済地理), 4) 個人と社会の衛生にかんする講話, 5) 地理, 6) 水についての実用的知識と対話, 7) 土地と空気について, 8) 自然科学 (植物学と動物学), 9) グラフの基礎知識, 10) 物理, 11) 化学, 12) 力学, 13) 外国語, 14) 労働組織, 15) 労働過程の力学と生理学, 16) 百科全書的専門知識。

(1) Там же.

(2) Н. В. Вихирев, там же, стр. 16.

(3) Ф. Ф. Королев, там же, стр. 403.

(4) Ф. Ф. Королев, там же.

この教科プランを革命前の1914年のプラン⁽¹⁾と1920年の革命後最初の初等・中等普通教育プラン⁽²⁾と比較しての長所は、前者との場合、1. 宗教科の廃止、2. 自然科学教科の大幅増加、3. 外国語の過重負担からの解放、4. 社会科学の導入、であり、後者との比較では、5. 政治性・党派性の強調、6. 実生活と密着した教科目、7. 労働教科の最初の導入、があげられる。このように1921年のプランは、党派性と実生活の重視、社会科学と自然科学の統一などすぐれた側面をもってはいたが、一方では、発生初期の採用＝入学基準が党派性を無視し、知識水準については「おおまかな読み書き、整数の四則算」程度であったことを考えると、16科目（細分すると30科目）を3年間で充分身につけることはとうてい不可能であり、逆に教材の過重負担により学力低下を招いた。それにしても体育および芸術教科の欠落は指摘されなければならない。1921年の教科プランにもいまだ、発生初期における労農予備校の二つの目的が反映していたといえる。

(ロ) 建設期における基礎教科の重視

1921年の範例的教科プランは、その後の実践の中で、教材の過重負担による学力低下という矛盾を露呈したため、職業教育監督局労農予備校部は1924年に新しい義務的教科プランを作成した。

1924年昼間労農予備校教科プラン⁽³⁾

	技 術 系				社 会 ・ 経 済 系			
	一学年	二学年	三学年	合 計	一学年	二学年	三学年	合 計
ロ シ ア 語	8	6	4	18	8	6	5	19
数 学	10	9	10	29	10	8	8	26
外 国 語	-	2	2	4	-	2	2	4
物 理	-	8	8	16	8	8	6	14
階 級 闘 争 史	4	3	4	11	4	4	5	13
経 済 学	-	2	2	4	-	3	4	7
経 済 政 策	-	-	2	2	-	-	2	2
政 治 学 教 程	3	-	-	3	3	-	-	3
生 物	4	3	3	10	4	3	3	10
地 理	5	2	2	9	5	3	3	11
化 学	-	3	2	5	-	3	2	5
図 表 の 基 礎	4	2	2	8	4	-	-	4
合 計	38	49	41	119	38	40	40	118

1924年の教科プランは、1921年のにくらべて非常に整備され、労農予備校がはっきりと大学高専への『運河』という一つの目的に統一されたことを意味する。とくに、ロシア語、階級闘争史、数学、物理の重視が目立つ。しかしこの教科プランは、昼間労農予備校の修学期間3カ年に応じてつくったものであり、27年後半から実現した4年制教科プランに改編しなければならなかった。この改編は1926年から28年にかけておこなわ

(1) Ф. Ф. Королев, там же, стр. 15-37.

(2) Н. А. Константинов, Е. Н. Медынский, М. Ф. Шабаева, «История педагогики», Гос. уч.-пед. изд. Минист. Прос. РСФСР, 1956, стр. 371.

(3) Н. В. Вихрев, там же, стр. 19.

1924年夜間労農予備校教科プラン⁽¹⁾

	技 術 系				社 会 ・ 経 済 系			
	一学年	二学年	三学年	四学年	一学年	二学年	三学年	四学年
数 学	6	6	6	8	6	6	6	6
ロ シ ア 語	6	4	4	4	6	4	5	4
政 治 学 教 程	4	-	-	-	4	-	-	-
階 級 闘 争 史	3	3	2	-	3	3	3	4
経 済 学	-	-	3	3	-	-	4	4
自 然 地 理	3	-	-	-	3	-	-	-
経 済 地 理	-	2	2	-	-	2	2	-
生 物	3	3	2	-	3	3	2	-
物 理	-	5	5	5	-	5	5	5
化 学	-	-	-	4	-	-	-	4
図 表	-	2	2	2	-	2	-	-
合 計	25	25	26	26	25	25	27	27

れそれによって1928年の教科プランはつぎのようなものとなった。

1928年労農予備校4週間教科プラン⁽²⁾

	1 学 年			2 学 年			3 学 年			4 学 年		
	実験室	集団授業	合計	実験室	集団授業	合計	実験室	集団授業	合計	実験室	集団授業	合計
数 学	24	24	48	22	24	46	20	24	44	26	24	50
ロ シ ア 語	24	24	48	22	12	34	20	12	32	20	12	32
階 級 闘 争 史	16	8	24	10	6	16	8	4	12	12	6	18
経 済 学	16	8	24	-	-	-	8	4	12	14	6	20
地 理	10	6	16	10	2	12	10	2	12	-	-	-
生 物	10	6	16	10	2	12	10	2	12	10	2	12
図 表 の 基 礎	-	-	-	6	2	8	6	2	8	6	2	8
物 理	-	8	8	16	8	24	20	8	28	26	8	34
化 学	-	-	-	10	6	16	10	6	16	-	-	-
製 図	7	1	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ド イ ツ 語	-	-	-	-	16	16	-	8	8	2	8	10
戦 争 の 科 学	-	-	-	6	2	8	6	2	8	6	2	8
合 計	107	85	192	112	80	192	118	74	192	122	70	192

1928年の教科プランは、24年のに比べて基礎教科の時間数が一層増大している。たとえば、一週間当りの全学年合計時間数にして、ロシア語2.5倍、経済学2.5倍、階級闘争史1.5倍、物理1.5倍、生物1.3倍、数学1.3倍となっている。1928年教科プランの第4学年、すなわち大学高専入学直前の学年の一週間当たり時間数を、普通中等教育の大

(1) Там же, стр. 20.

(2) Под ред. К. И. Былинского, «Лабораторный план в практике работы рабфака им. Н. И. Бухарина при 2 МГУ», Наркомпрос РСФСР, Госизд. 1929. стр. 14-16.

学高専入学直前学年（第2科学校第9学年）の教科プラン⁽¹⁾と比較すると、労農予備校における基礎教科の重視が一層明白になる。労農予備校第4学年の一週当たり時間数は、第2科学校第9学年の数学3倍、ロシア語2倍、地理2.5倍、化学4倍、物理・生物のおの2倍である。

1928年教科プランのロシア語には文学も含まれているが、文学のふやされた時間数は今まで教えられていなかったロシアの革命的民主主義者、ゲルツェン、ベリンスキー、チュルヌイシェフスキー、ドブロリュエボフなどの創造的著作の学習にあてられている。⁽²⁾当時、普通中等教育学校（第2科）では歴史の独立教科はなく、社会科学の中に含まれていたが、労農予備校では階級闘争史として全学年で教えられ、内容は古代から10月革命までの史的唯物論にもとづく歴史および帝政ロシアの階級闘争とボルシェビキ党の基本理念、組織、政策の理解、さらに、現代帝国主義、戦争と平和、革命と国防、中国革命と労働者階級の国際的組織——コミンテルンや第二インターナショナルの学習を含んでいた。⁽³⁾

社会主義建設が進展するにつれて、高い資質をそなえたカードルが必要となり、学校教育にたいして科学の基礎をしっかりと身につけた技術者や組織者の養成が要求されるが、普通教育学校がこれにこたえるのは、ようやく1931年になってからであるのにたいして、労農予備校は1928年の教科プランにおいて、すでにこの要求にこたえていたといえる。また、戦争の科学が普通教育学校に導入されるのは1932年であり、労農予備校はこの点でも迫りくる祖国防衛戦争にいち早く備えていた。レーニンが、「共産党細胞はわが党の代表者であり、労農予備校はわれわれの階級の代表者である」⁽⁴⁾といったことがここにも示されている。

（ハ）教育方法としての「分団・実験室法」

労農予備校発生期における教育方法は、ほとんどのところで、いわゆる普通の教室での講義方法がとられていた。ビヒリョーフによれば、講義形式がとられたのは、教育内容が広く多方面にわたり、それを急速に学習しなければならなかったし、教科書もなく教授法など検討されていなかったことによる。⁽⁵⁾

1924年、プロジェクト派と呼ばれる数人の教育者によって、アメリカの「ダルトンプラン」(Далтон-план)が移入され、高学年では、それが「分団・実験室法」(Бригадно-лабораторный метод)として受け入れられた。労農予備校でもこの「分団・実験室法」が、新しい社会にふさわしい「新しい教授法」として滲透していった。「分団・実験室法」によれば、まず、学生を3～5人の小集団に分団し、教師はそのおのおのの集団に4週間分(1928年の教科プラン参照)の課題を与える。その後各集団が自主的に教材、日時、場所(実験室か研究室)を選んで学習し、その結果を学生が集団的に点検した。

(1) Под ред. И. Векслера и Р. Харитовой, «Вторая ступень советской трудовой школы», Главсоцвос НКП РСФСР, 1929. стр. 151.

(2) Красное студенчество». 1928-1929. № 11. стр. 8. (Н. М. Катунцев, там же.).

(3) Под ред. К. И. Былинского, там же, стр. 79-103.

(4) レーニン, 「ロシア共産党(ボ)第十一回大会」, 全集, 大月版, 第33巻, 322頁.

(5) Н. В. Вихирев, там же, стр. 21.

プロレタリアートの独裁と過渡期の教育

教師はその間、学生の作業時間数を学生の提出する計算票に記入し、月末に各集団の報告書や図表を評価するのみである。この分団・実験室法は、当時何よりも「学生の自主性を発揮させ、学生の実生活や生産上の経験を利用できる」⁽¹⁾のものであり、伝統的なつめこみ形式の講義方法を克服する「完全にプロレタリア的教授＝学習方法」として労農予備校の普遍的教授法とされていた。その後、成績評価は教師と学生の合同会議で行なわれるようになったり、作業時間の量的評価（出席率）だけでなく、質的评价（成果の達成度）が行なわれたりしたが、1932年8月25日の党中央委員会の決定⁽²⁾まで分団・実験室法は多かれ少なかれ労農予備校および他の教育機関に影響をおよぼした。

分団・実験室法によってもたらされる欠陥は、1) 教授＝学習過程における教師の指導的役割の低下、2) 科学の系統的な修得を妨げること、3) 学習時間の量のみが評価されること、4) その結果、生徒の個性が類型化される、5) グループ評価による個人の単独責任の軽視、などである。

レニングラード大学のジェルジャビン（Н. С. Державин）教授は、「分団・実験室法は子どもの『ゴッコ遊び』に方法論的意義づけを与えたり、法規化したり、文字をひねってもったいぶった術語で紛飾しているにすぎない」⁽³⁾と当時すでに、きびしく批判していた。

分団・実験室法は建設期における労農予備校の任務としての労働者、農民に科学の基礎を身につけさせることに充分ふさわしいものとはいえないが、しかし、それが学生の自主性と創造性をのばした点は正しく評価されなければならない。ただ、この自主性および創造性が、目的原理であるとともに方法原理でもある集団主義教育に正しく位置づけられずに、教授＝学習の方法として把握されていた点にこそ問題があったといえる。

しかし、分団・実験室法の欠陥の克服においても、普通教育学校に比べて労農予備校は先進的役割を果たした。これは労農予備校の管理・指導をおこなっていた職業教育監督局の指導性によるところが大きい。分団・実験室法の欠陥が、つまるところ“学力低下”にあるところから、職業教育監督局は、1926年1月に学生の成績評価にかんする新しい規定を設け、半年ごとに学習活動の点検を行なった。職業教育監督局の特別文書は、つぎのように述べている。「労農予備校生の進級は、学生の綿密な成績点検と質的條件（出身階層）の入念な点検によって行なわれなければならない。そして、いかなる場合でも、その学年の知識習得が充分できていない学生に進級を許してはならない。とくに、一学年から二学年への進級のための成績点検は厳重にしなければならない。なぜなら、一学年の学習が全ての基礎になるからである。」⁽⁴⁾

1926年6月から、労農予備校の最終学年で基礎科目——社会科学、ロシア語、算数、物理——にかんする学力テストが行なわれることになった。これについて、1927年3月26日に開かれたモスクワ労農予備校活動者大会は「1926年に実施された卒業生の成

(1) Н. В. Вихирев, там же стр. 21.

(2) «Об учебных программах и режиме в начальной и средней школе».

(3) «Научный работник», 1926, № 5-6, стр. 42. 48. (Н. М. Кацунцев, там же, стр. 75).

(4) «Архив Министерства просвещения РСФСР», 1925-1926. д. 66, см. 2, л. 45. (Н. М. Катунцев, Там же, стр. 75.).

績試験は、高等教育へ進む労農予備校生の学習の質を一層高めたと考える。ゆえにこのような卒業生の学力テストは、今後とも毎年行わなければならない⁽¹⁾と決定している。労農予備校生の落第が行なわれるとともに、大学側も労農予備校生にたいして知識水準をきびしく要求するようになってきた。学生の知識水準向上のための職業教育監督局の具体的方策にもかかわらず、労農予備校生の学力向上はすぐには実現しなかった。たとえば、モスクワ大学附設労農予備校では、1927・28学年度に、成績不良生が33.3%、大学からふるい落とされたものは18.8%にのぼった。この欠陥を克服するためには、一層強力な行政指導とともに、それに呼応した学生自身の革命初期の創造性より一層次元の高い、すなわち、社会主義の時代への発展を反映した自主性・創造性の発揚をまたねばならなかった。

(二) 専門別再編成と“突撃作業隊”

1928年1月15日付ロシア共和国人民委員会議の決定によって、全ての労農予備校は、技術系と社会・経済系の二つに統一されることになり、早くから存在していた教育系と生物系は先の二つに吸収されることになった。技術系と社会・経済系の比率は3対1の割合で考えられ、卒業生のおよそ75%を技術系大学に送ることが望ましいとされた。

1930年5月16日に、労農予備校史上画期的意義を有する党中央委員会の「労農予備校の改革にかんする」⁽²⁾決定が採択された。

「大学高専を専門的特質に応じて、それに対応した経済機関に移譲するという大学高専の再編にかんする最近の中央委員会の決定にもとづいて、労農予備校の根本的改革が行われなければならない。

1. 各々の大きな労農予備校の中にある様々な部門は、独立した労農予備校（工業技術、農業、経済、医学、教育等々）に再編成すべきである。さらにその独立部門を、大学高専のうちもっとも近い特質をもつものに正しく結合し、それを経済・教育合同機関（Хозоб'единение）と人民委員会議に適応した管轄に結びつけること。教育系労農予備校は、教育系大学に固定し教育人民委員部の管轄におく……（2, 3, 4, 略）

5. 大学高専をその管轄に入れた全ての経済教育合同機関や人民委員部は、大学高専に附属して今年中に昼間および夜間労農予備校を組織すること、夜間労農予備校は、大学高専にかまわず、大産業地域や大企業、あるいは大きなコルホーズやソホーズに附属してつくられる……

6. 労農予備校生の学問的水準を高め、大学生の社会的構成の30%までを労農予備校卒業生で占めるようにすること……（7, 略）

8. 昼間労農予備校の学習期間は3年まで短縮すること、夜間労農予備校と文化的に遅れた民族地区の労農予備校の学習期間は4年にすえおくこと、昼間労農予備校の最初の一学年は、生産から離れることなく学習すること、夜間労農予備校の最後の学年は生産から離れておこない、学生を経済給費生にすること……」

(1) ЦГАОР, 1927. ф. 5572, оп. 5, ед. хр. 22, л. 6. (там же).

(2) «О перестройке рабфаков». Постановление ЦК ВКП (б) от 16/V 1930 г. («Директивы ВКП (б) по вопросам просвещения». Учгиз-Наркомпрос РСФСР, 1931. стр. 156-157).

プロレタリアートの独裁と過渡期の教育

この決定により、労農予備校は各々の専門別に大学高専に附属し、それがまた各人民委員会議の管轄に入ることになった。このような専門別再編成は、学生の成績点検とあいまって労農予備校生の専門的知識水準の向上をもたらした。1932年末の調査は、労農予備校における教授＝学習方法は根本的に改善され、学課が復活し、時間表が固定され、教師の指導性は著しく増大したことを示している。

こうした行政指導に呼応して、1930年の終り頃から、教育活動における社会主義的競争ともいわれる学生の能動的な新しい運動が労農予備校に起った。それは“突撃作業隊”といわれるもので、生産現場における工業生産突撃隊をとり入れたものであり、3～4年の労農予備校の全学習を2.5～3年で終えようとするものである。“突撃作業隊”のスローガンは、『学習の質を下げずに、学習のテンポを速めよ！』であった。ブイシンスキー（А. Я. Вышинский）は、回想録の中でつぎのように語っている。「“知識を授けよ！”これは、大学高専にとどろきわたった闘争のスローガンである。労農予備校生が大学高専に現われるやいなや、講堂では聴講者から、工作室では職人から、実験室では実験生から、このスローガンがはげしく投げつけられた。“知識を授けよ！”というスローガンが一番はじめに出てきたのが、労農予備校卒業生で一杯になっている大学高専からであったということは、プロレタリアートや農民出身の青年たちが、100%知識を獲得する上で、邪魔になっているものは全て打ちくだいてしまうという意気込みを示すものである。」⁽¹⁾

IV 社会主義建設の達成と労農予備校の消滅

発生し、発展したあらゆるものが消滅するように、労農予備校も1940・41学年度を最後に消滅した。(2) 消滅の要因としては、(1) 高等教育プロレタリア化の進展、(2) 中等普通教育の発展、(3) 労農予備校の内部矛盾、(4) 社会主義建設の達成と敵対階級の消滅をあげることができる。

1) 高等教育プロレタリア化の進展

労農予備校は、つぎに示すように年々卒業生を送りだし、1924年には、早くも大学高専採用者18,000人のうち37%を、25年には38.5%、26年には40%を占めるようになった。1923年から、労農予備校卒業生の進学希望者は無試験で大学に採用され、残りの定員を、党機関やコムソモール、労働組合、中学卒業生などに割りあてた。⁽⁴⁾ 25・26学年度からは、労農予備校卒業生でも成績の悪いも

(1) Н. М. Катунцев, там же.

(2) «Педагогический словарь», Изд АПН 1960. Т. II, стр. 245-246.

(3) Н. В. Вихирев, там же, стр. 14.

(4) 1924年には残りの定員を党員25%,コムソモール15%,労働組合中央評議会35%,ゲ・ベ・ウ3%,地方教育委員部2%,負傷兵10%,月謝を払う学生10%,25年には、党機関と労働組合50%,中学卒業生25%,労働知識人10%,その他15%に割り当てた。(吉田熊次著「ソ連邦における教育改革と教育思想」畝傍書房,1942,115-116頁)。

のは入学させないことになったが、一方では、中等普通教育卒業生にたいして一層きびしい政治的試験を課すことによって、富農や小ブルジョア階級の大学進学を強制的に抑圧し、高等教育プロレタリア化を促進させた。その結果は、大学入学者中に占める労働者および党员・コムソモール員の年々の増加となってあらわれた。

入学者の社会的・政治的構成⁽¹⁾

学 年 度	入学者に占める労働者の割合			入学者に占める党员・コムソモール員の割合		
	大学高専	労農予備校	中 等 技 校	大学高専	労農予備校	中 等 技 校
1926・27	28.7%	51.0%	21.8%	46.0%	75.0%	36.2%
1927・28	34.6	60.2	22.7	54.1	79.7	32.0
1928・29	42.3	68.4	35.5	55.2	84.0	37.4
1929・30	63.7	72.9	-	-	-	-

1928年と29年に高等教育プロレタリア化にかんする、党中央委員会の二つの決定が出された。28年7月の「新しい専門家養成の改善について」と、29年11月の「国民経済の要員について」である。⁽²⁾ これらの決定によってとくに工科系大学のプロレタリア化が重要視され、「千人の党员」(парттысячники)、「千人の労働組合員」(профтысячники)が、工科大学に送りこまれることになったが、ある場合にはそれが「三千人」にもなった。⁽³⁾

大学プロレタリア化の進展を、モスクワ大学と附設労農予備校の関係でみると、1920年に附設労農予備校生は764名、そのうち労働者34%、農民56%、その他10%であった。⁽⁴⁾ 当時は学習期間が短かったため、1920年には第一回卒業生を送りだし、無試験でモスクワ大学に採用された。その結果、革命前には労働者と農民をあわせて0.5%であったモスクワ大学々生の社会的構成は、入学者3,212名のうち労働者18.9%、農民

大学高専における学生の社会的構成⁽⁵⁾

国立モスクワ大学学生の社会的・政治的構成⁽⁶⁾

学 年 度	労働者	農 民	事務員	その他	学 年 度	労働者と農民とその子弟	党员とコムソモール員	党员候補	コムソモール員
1923・24	15.3%	23.5%	24.4%	27.8%	1926	22.3%	18.4%	18.5%	11.9%
1924・25	20.7	24.5	35.8	8.9	1928	24.2	17.3	23.7	22.5
1925・26	24.2	25.7	35.3	14.8	1929	28.5	17.3	24.8	25.5
1926・27	25.6	25.3	37.5	11.9	1930	39.0	16.0	36.0	24.0
1927・28	26.9	24.2	39.4	9.5	1931	38.1	18.4	38.0	24.2
1928・29	27.7	26.1	38.4	6.8	1932	60.4	13.3	32.4	36.4

- (1) «Народное просвещение в СССР, за 1928/29», Наркомпрос РСФСР Госизд. 1930. стр. 34.
 (2) «КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК», ч. II, Госполитиздат, 1954. стр. 518-524. 632-642.
 (3) 若き日のニキータ・フルツォフは、1925・26学年度に労農予備校に入学し、29年に「千人の党员」の一人としてモスクワの工科大学に入学している。
 (4) К. Т. Галкин, «Высшее образование и подготовка научных кадров в СССР», Советская наука, 1958. стр. 80-81.
 (5) «Народное просвещение в СССР за 1928/29», там же.
 (6) Александров П. И. 他編著, 吉川・川野辺訳, 「モスクワ大学」, 山本書房, 1959, 85-97頁

プロレタリアートの独裁と過渡期の教育

17.2%となった。モスクワ大学附設労農予備校は毎年500名前後の卒業生を送りだしていたが、1927年在校生1,328名のうち、労働者53.2%、農民28.7%で、両者をあわせると81.9%となり、当時のモスクワ大学の構成（労働者・農民40.7%）とくらべて2倍の構成比であり、モスクワ大学プロレタリア化の密度を高めるために附設労農予備校が如何に大きな役割を果たしたかが解る。

2) 中等普通教育の発展

1918年の「学校令」と「宣言」にみられるように、教育人民委員部は、革命当初「第1科学校→第2科学校・9年制学校→大学」のコースを学校制度の中心的形態と考えていたのであるが、過渡期のきびしい現実によってこの理想は変質せざるをえなかった。その原因として、普通教育学校の物質的基礎の欠除や教育学上の理論的誤謬などもあげられようが、もっとも基本的な点は、教育機会の拡大と教育内容にたいする労働者、農民大衆の要求に耳を傾けず、「教育機会における労農大衆の優先」要求にたいしては、能力による教育機会の均等という近代的理念を対置させることによって結局は、第2科および9年制学校におけるブチブル知識人、ネツプマン、クラークの子弟の増大をもたらしたことによる。このことは労農予備校や工場実習学校、農村青年学校の発展とあいまって、1924年の第2科卒業生3万人のうち、わずか650人が大学高専に採用されたにすぎない（同年の大学高専採用者は13,500人）という現象に反映している。このような第2科学校にたいして、ソルモフスク労働者集会で、労働者のマメノーフ（Маменов）は、「第2科学校は、われわれの子どもに必要なものを与えていないので、子どもたちはそこから大学に入ることができない」⁽¹⁾と語り、同じくナジェジナ（Надеждина）は「われわれの子どもは補足的準備をしなければ第2科学校から大学高専へ入ることができずすぐ労働市場へ出てしまう。そのため何年かの中に大学高専は労働者でないものだけが入学するようになるだろう」⁽²⁾と警告を発している。また、第一回国民教育活動者会議でサラトフ（Саратов）は「第2科学校は生産に関連した設備が少ないので、生産との結びつきが少なく、学校は労働者の直接的な利益にほとんどこたえていない」⁽³⁾と批判している。

9・10年制学校の発展⁽⁴⁾

このような中等普通教育の欠陥は、1931年9月5日付党中央委員会の「小・中学校にかんする」決定の実践過程で急速に克服されていった（もちろん新たな矛盾をはらみつつも）、系統的な「科学の基礎」をしっかりと

学 年 度	学 校 数	生 徒 数 (千人)	学 年 度	学 校 数	生 徒 数 (千人)
1914・15	1,953	635	1933・34	2,436	2,011
1923・24	2,036	669	1935・36	6,010	3,169
1925・26	1,642	707	1937・38	9,909	7,354
1927・28	1,775	857	1939・40	15,810	10,834
1929・30	1,914	1,117	1940・41	18,811	12,198
1931・32	5	4			

と身につけた卒業生が9・10年制学校から大学に送りだされ、9・10年制学校は次第に大

(1) Под ред. В. Н. Касаткина и А. С. Розина, «Что говорят массы о народном образовании — сборник материалов», Наркомпрос, РСФСР, 1929, стр. 8.

(2) Там же.

(3) Там же.

(4) «Cultural progress in the U. S. S. R.», Moscow, 1958, p. 86-87.

学高専への基本的なパイプとなっていた。1932・33学年度以降における9・10年制学校の急速な拡大がそれを示している。

3) 労農予備校の内部矛盾

1930年5月16日付、党中央委員会の「労農予備校にかんする」決定で、労農予備校はその専門に応じて各人民委員部の管理下に入ったことはすでに述べた。カードル養成の各人民委員部による掌握は、生産力発展の二つの主導的力——労働手段と労働力——を同時に一カ所でコントロールすることを可能とし、両者の矛盾が爆発する前に小きざみな統一をもたらし、それによって生産力の円滑な発展を約束するものであった。この結果、すでに労農予備校の量的発展のところのみならず、驚異的な発展がもたらされ、1930～34年間だけで労農予備校入学者は78万5千人に達し、卒業生は19万8千人となった。これは労農予備校のこれまでの10年間に送り出した卒業生の5倍以上であった。(1)

しかし、30年の改革とそれにつづく急激な発展の中には、労農予備校を消滅へと導く内部矛盾をもはらんでいたのである。その第一は、急激に拡大された労農予備校の通常の活動を維持するだけの設備や財政的準備がなかったことである。第二は、卒業生の数が大学高専の採用定員を大幅に上まわってしまったこと、第三は、管理が各人民委員部に分割されたことにより、中央集権的指導と全国的調整が困難となり、教科プランやプログラムの統一性と系統性が失なわれたことである。これらの矛盾は労農予備校の発展期に起きたものであれば、決して克服不可能なものではなかった。すくなくとも、これらの矛盾が単独では労農予備校を消滅させる決定的要因とはなりえない。しかし、これが社会主義建設の達成期、す

なわち過渡期の消滅と結びついたがゆえに労農予備校消滅への一つの重要な（副次的ではあるが）条件となったのである。

中等普通教育の充実にとともに、労農予備校の大学高専入学者に占める割合は低下し、入学者の絶対数も減少しはじめた。

大学高専入学者の学歴構成(2)

学年度	学歴				
	7年制 学校修了	10年制 学校修了	中等専門 学校修了	労農予備 校修了	講習会 又は独学
	%	%	%	%	%
1933	4.2	13.3	10.4	55.0	17.1
1934	2.1	13.2	12.0	46.8	25.9
1935	-	16.5	15.4	36.4	31.7

4) 社会主義建設の達成と敵階級の消滅

1929年という年は、中農がコルホーズに入ってきたということと、総生産高における工業部分の割合が農業部分を上まわったこと、および第一次五カ年計画が実際に動き出したということによって、ソ連邦の歴史で『偉大な転換の年』といわれている。その年はまた、アメリカをはじめとする世界の帝国主義諸国にとっても転換の年であった。ただ帝国主義諸国にとっては、世界恐慌への転換を意味したのであるが。

1937年という年は、ソ連邦の歴史において1929年におとらず重要な意味をもっている。それは、1929年にたてられた「ソ連邦における国民経済の資本主義的諸要素を最後

(1) Н. М. Катунцев, там же, стр. 79-80.

(2) 吉田熊次著, 同, 123頁.

的に清算し、ソビエト人の意識のなかの資本主義的な残りかすを克服し、国内の全勤労者を積極的、意識的な社会主義建設者に変えるという課題」を、すなわち社会主義建設を達成するという課題を基本的に遂行したということによる。

社会主義建設の達成は、経済の分野では、1937年4月1日に

4年3カ月で達成された第二次五カ年計画によってもたらされた。この結果、国民所得、

農業集団化指標⁽²⁾

年	農家数	耕地面積
	%	%
1918	0.1	-
1927	0.8	-
1928	1.7	2.3
1929	3.9	4.9
1930	23.6	33.6
1931	52.7	67.8
1932	61.5	77.7
1937	93.0	99.1
1940	96.9	99.9

の原則が貫かれている。また、「ソ連邦市民の権利の平等は、その民族および人種の如何を問わず、経済的、国家的、文化的ならびに社会的、政治的生活のすべての領域において不動の原則である」ことが確認された。全市民の平等な権利を確立した基礎は、まさにソ連邦における敵階級の消滅である。不平等にすべき人間がすでに存在しないのである。また、第二次五カ年計画遂行の過程で「中堅カードルがすべてを決定する。」のスローガンに応じて

生れてきた、工業生産突撃隊員やスタハーノフ運動にもソ連邦が社会主義の時代に入ったことが反映されている。

教育の分野では、経済の分野と政治の分野における社会主義建設の達成と敵階級の消滅を反映して、すでに1935年12月29日の法令によって、本人の社会的身分および、親

社会主義経済の占める割合⁽¹⁾

	1924年	1928年	1937年	1956年
	%	%	%	%
基礎的生産設備に占める割合	59.8	65.7	99.6	99.99
国民所得に	35.0	44.0	99.1	99.99
工業総生産額に	76.3	82.4	99.8	100.00
農業総生産額に	1.5	3.3	98.5	99.89
商取引高に	47.3	76.4	100.0	100.00

工業及び農業総生産額、商取引高に占める社会主義的部分の割合は、98%ないしは100%となった。農業集団化においても、1937年には農家数にして93%、耕地面積にして99%が集団化され、農業の社会主義的再編が基本的に達成されたことを示している。

政治の分野では、何よりもまず、1936年12月5日の全ソビエト第8回臨時大会で採択された新憲法が、社会主義建設の勝利をあらわしている。「労働者と農民の社会主義国家である」ことが宣言されるとともに「各人からはその能力に応じて、各人にはその能力に応じて、各人にはその労働に応じて」という社会主義

ソ連邦住民の階級構成⁽³⁾

	1913年	1928年	1937年	1956年
	%	%	%	%
工場・事務その他の労働者	17.0	17.6	36.2	59.5
集団化された農民と協同組合職人	-	2.9	57.9	40.0
個人農(富農を除く)と非協同組合職人	66.7	74.9	5.9	0.5
地主、大小都市ブルジョア、商人、富農	16.3	4.6	-	-

(1) «Forty years of Soviet power in facts and figures», Foreign languages publishing house, Moscow, 1958. p. 26.

(2) Op. cit. p. 35.

(3) Op. cit. p. 23.

が犯罪などによって権利の制限を受けたと否とにかかわらず、大学高専の入学試験を受けることができるようになっていた。このように、社会主義建設の達成と敵階級の消滅によって、大学高専のプロレタリア化という労農予備校の主要な任務はすでに終わったのである。労農予備校はここで新たな任務をもつか消滅するかの転換期に立ったが、そのさい中等普通教育の発展と労農予備校の内部矛盾の存在のゆえに消滅への道を歩まざるをえなかったといえる。

労農予備校は、1940・41学年度に消滅した。⁽¹⁾

V 過渡期の教育法則と近代教育理念の超克

1) 教育制度の多様性

これまでのあらゆる階級社会の、とくに資本主義社会の支配階級は、全ての面にわたって人民大衆の能動性を抑圧し、創造性を否定しつづけてきた。支配階級によれば、政治や経済の指導、管理、指揮労働、あるいは文化・教育の分野における、創造にむすびついているすべての精神労働の複雑な諸形態は、支配階級およびその代表にのみたずさわることができるものであるとして、自己の支配を正当づける一つの口実にしてきた。たしかに、歴史の「平和的」な時代には、階級社会の経済、政治、文化、教育の分野における人民大衆の役割はそれほどめだたない。支配階級は、肉体的・精神的強制のあらゆる道具——警察と軍隊、司法機関と宗教、行政機関と学校——を利用して、政治における人民大衆の役割を最小限に引下げ、人民大衆の能動性をおさえつけている。階級社会においては、人民大衆による文化的創造はけっして多くはないが、そのことは人民大衆の創造性の欠除ではなく、階級社会が「人民の逸材の墓場」そのものであることの証しにほかならない。

階級社会においても人民大衆は、偉大な創造性を発揮するのであるが、変革期には、とくに革命の時期には大衆の創造的役割は一層力づくよく発揮される。変革期には人間のあらゆる能力を特別に高揚し緊張させ、自主的意識、意志、熱情、想像力をよびおこされるが、諸階級の変革期における人民大衆の能動性、創意性が教育の分野で発揮され結実したのが学習サークル発生から労農予備校法制化への一連の実践にほかならない。

「住民への呼びかけ」に示された階級性の欠除と、「八月の布告」にあらわれた、労働者、農民の極度に低い文化水準への不十分な配慮というソビエト政権初期教育政策の矛盾を、人民大衆自身が教育を「組織」することによって解決していったのである。自分たちが組織したインフォーマルな学習サークルを、大学プロレタリア化の観点から大学に附設させようとする闘いの中で、労農予備校を真に自分たちのものとするために労働者・学生を含めた「集団管理」体制を要求し、かちとってゆく。

権力と人民の矛盾が革命前の敵対的なものから非敵対的なものに転化したことにより人民大衆の創造的教育活動を権力が積極的に援助し、インフォーマルなものをフォーマルな教育体系へくみ入れてゆくことによって、過渡期の教育制度は「多線型」ともいう

(1) «Педагогический словарь», там же. «Cultural progress in the U. S. S. R.», Foreign languages publishing house. Moscow, 1958. p. 83.

べき新しいタイプのものとなる。ソ連邦では労農予備校とともに工場実習学校（ФЗУ）と農村青年学校（ШКМ）が労働者、農民およびコムソモールによって創造されたが、この下からつくりあげられた教育施設が過渡期における教育制度の中心となっている。

このように過渡期における教育制度が多様な形態をとることは、一つの教育法則といえるであろう。これは変革期における人民の要求の多様性と創造性によるものであるが基本的には、過渡期のウクライナの多様性を反映している。過渡期における教育制度の多様性という教育法則は、革命後の中国における工農速成中学および紅専大学、さらにその後の「脱靴学校」、「戴帽子小学校」、「安領小学」などによって一層豊かにされている。

ソ連邦および中国における多様性が初等・中等教育を中心にしていたことは、革命前における資本主義発達が「中位」および「後進」であったがために初等義務教育すら導入されていなかったという特殊性によるのであり、資本主義社会で義務教育が導入されている諸国の過渡期においては、中等および高等教育のうちに多様性があらわれるであろう。

2) 「階級闘争の知識」から「生産闘争の知識」へ

一定の技能をすでに身につけた労働者や農民が主体であった労農予備校においては、大学プロレタリア化の課題とあいまって、教授＝学習過程における知識の教授＝学習が重視されることは言をまたない。「世界の知識にはただ二つの種類があるだけである。その一つは生産闘争の知識とよばれ、もう一つは、階級闘争の知識——民族闘争の知識もこのなかにふくまれる——とよばれる。」⁽¹⁾二つの知識は教授＝学習過程において矛盾しつつ統一しているのであり、一方だけが存在するという事は、階級の発生をみて以後ありえない。しかし、一定の歴史的時期や一定の条件のもとでは、一方の知識の教授＝学習が主要な側面となり前面におしだされ、他方は副次的となってあまり目立たないということはある。

すなわち、生れたばかりの社会主義的ウクライナが、土台において、いまだ打倒されはしたが強力な資本主義的ウクライナにくらべて弱く、プロレタリアートの独裁のブルジョアジー抑圧の側面が強く前面に押しだされ、敵対的矛盾が主要な社会的矛盾である歴史的段階においては、「階級闘争の知識」が、知識の教授＝学習過程の主要な側面となる。1926年以降、国の社会主義的工業化、農業の集団化を中心に全分野における社会主義の全面的攻撃の時期に進むにいたって、すなわち、土台における社会主義経済的ウクライナが優勢となり、プロレタリアートの独裁の社会主義建設の側面が強く前面に押しだされることによって、この段階における知識の教授＝学習の主要な側面は「生産闘争の知識」に転化する。

過渡期における第二の教育法則は、復興期から建設期への発展に対応して、知識の教授＝学習における主要な側面が階級闘争の知識から、生産闘争の知識へと転化する、ということである。

(1) 毛沢東、『学風、党風、文風を整頓せよ』、(国民文庫「整風文献」, 28頁)

労農予備校の発展の全過程——教育機会の質的・量的拡大、教授・訓育過程の内容と方法の発展——がこれを示している。学生の社会的構成におけるプロレタリア部分の優位性にもとづき、採用＝入学基準の党派性尊重から専門性の重視へ、それに対応した学生数、学校数の停滞、学習期間の4年制への移行がその転回点を示している。

第二の教育法則にかんするソ連邦の特殊性は、歴史上はじめての経験であるがゆえに転化までの時間が長かったことと、この転化が土台の要請によってはじめておこったことである。ソ連邦の経験を学べる国々では、主体的、能動的、意図的にこの転化をもたらすことが可能となるであろう。

3) 「教育機会均等」理念の超克

労農予備校の消滅および発生、発展の全過程から導きだされるものとして、「能力に応じて全てのものに均等に教育機会を保障する」という、近代の教育機会均等理念の超克をあげなければならない。

労農予備校の採用基準や大学プロレタリア化のためにとられた諸方策は、「能力に応じて」ではなく、職業や出身、前歴、政治的態度などによって教育機会を統制するものであり、近代がかちとった教育価値としての、出身や信条によって教育機会を差別しないという教育機会均等をふみにじったかに見える。しかし、教育機会の拡大を教育と生産的労働の結合に位置づけてみるならば、生産的労働の成果として生みだされた、教育機会＝自由時間が、それを生みだした労働者や農民に与えられることは当然のことであるし、労働したもののみにその成果が与えられるという点でもっとも「均等」なものであろう。そして、何よりも、「普遍的な」民主主義や、「永遠の」自由とか平等「一般」は存在せず、ただ「だれのための」自由かという具体的な民主主義が存在するのみであるように、「だれのための」均等かという具体的な教育機会の均等があるのみである。労農予備校の発生・発展・消滅の全過程がこのことを明らかにしている。搾取者と被搾取者の、食いあきたものと飢えた者との「平等」や前者が後者を略奪する「自由」が真の平等や自由でないように、敵階級が存在する過渡期においては教育機会の均等原則を敵階級にまで拡大することは真の均等ではありえない。教育と生産的労働の結合と、プロレタリアートの独裁に依拠した敵階級の教育機会の制限は逆にいえばそれだけ一層人民にとっては広い教育機会が約束されていることを示す。近代教育理念としての教育機会均等は、過渡期において一度否定されることによって一層豊かな内実を得たといえる。

だからといって、教育機会均等理念が階級社会で果してきた積極的役割を否定するものではない。それは、教育と生産的労働の結合の一側面に位置づけられ、他の側面——総合技術教育と集団主義教育——と統一的に把握され、実践されるならば、今後より一層、有効な人民の教育の旗じるしとなるであろう。その根拠としては、階級社会の上部構造にも、被支配階級の思想や組織が存在するからであるし、何よりも、教育機会均等理念が、相対的な真理を含んでいるにほかならない。

ソ連邦の過渡期においては、国内外の階級矛盾が、広範に激化していたという特殊性によって、教育機会均等の原則を広げる部分が、相対的に少なかったのであるが、統一

戦線の基盤が広く存在する国々では、より多くの部分に広げられるであろうし、また、そのような条件の下では、敵階級にたいしても教育機会の制限よりは再教育機能をよりはたらかしうるであろう。

これまで述べてきたことにもとづき、労農予備校史の時期区分をつぎのようにおこなう。

第1期 発生期

1918年秋の人民大衆の創造性による学習サークル発生から、19年2月の大学附設、9月の教育人民委員部による法制化、20年9月の人民委員会議の承認を経て、1920年12月の国民教育の問題に関する第1回党協議会までの時期。採用規準も十分確定しておらず、教科プランも修学期間も不統一で、伝統的教育方法にもとづく暗中摸索期とさえいえる。

第2期 発展期

1921年1月に終った党協議会で労農予備校の任務が確定されてから、学生数・学校数が最高の発展を示す1932年9月の中央委員会決定まで。この発展期はさらに、三つに小区分される。「**発展期第1小区分期**」は、第1回労農予備校代表者会議（6月）、最初の教科プランの制定（8月）、**修学期間3カ年に統一**（9月）などを含む1921年から、1925年末まで。採用規準におけるプロレタリア階級性が確立し、卒業生は無試験で希望する大学高専に入学でき、他の諸教育機関の一時的停滞をよそに学生数・学校数とも漸増をつづける時期である。「**発展期第2小区分期**」は1926年から1929年まで。分団・実験室法という教育方法における欠陥をもちつつも、1926年1月の教育人民委員部協議会特別決定「**労農予備校生の質的向上の対策について**」以来、党中央委決定（6月）、職業教育監督局による成績点検、落第の導入や、**労農予備校入学のための講習会**の発生、1928年の新教科プランや4年制移行などの具体的方策によって**科学の基礎知識の習得**が重視され、それに伴い学生数、学校数発展の停滞をきたした時期である。「**発展期第3小区分期**」は、1930年から、1932年まで。この期は、1930年5月の党中央委員会の「**労農予備校の改革にかんする**」決定によって、第2小区分期の科学の基礎知識の習得が、専門性の確立まで高められるとともに、学生自身の中から生れた“**突撃作業隊**”などの創造的能動性の新たな高揚により、学生数・学校数が驚異的な急増を示したことによって特徴づけられる。なお、第1小区分期は、土台における国民経済の復興期に対応し、第2、第3小区分期は、社会主義的再建期に対応している。

第3期 消滅期

1932年から、1940年の消滅までの時期。1931年9月の「**初等・中等学校にかんする**」党中央委員会の決定により、普通中等教育が充実しはじめるとともに労農予備校の内部矛盾が露呈し、高等教育プロレタリア化の任務を果し、急激に学生数が減少して消滅する時期である。この時期は、社会主義建設の達成と階級の消滅の時期に対応している。

おわりに

以上の小論の中でなしたことは、テーマの大きさにくらべて非常に小さなものでしかない。確実になしたことは、(1)ソ連邦における資本主義から社会主義への過渡期の時期区分をめぐる問題に、教育の分野からひとつの実証を提起したこと、(2)わが国ではもちろんのこと、ソ連邦におけるソビエト教育史研究においても、初等・中等教育と高等教育の谷間として体系的な解明がほとんどなされていない**労農予備校の発生から消滅まで**を実証的に明らかにしたこと、(3)まったく仮説にすぎないが、過渡期の教育法則を提起したこと、のみである。

なお、教育と生産的労働の結合に関する筆者の仮説にかんしては多くの異論もあると思われるので、今後の研究と実践の中で一層緻密にしてゆかねばならない、とくに、教育と生産的労働の結合を総合技術教育のみに限定する論者や、総合技術教育を学校の一、二の教科と考える論者からの批判にたえうるものでなければならぬ。また、過渡期の

三つの教育法則にしても、少くとも第二次大戦後に過渡期を歩んでいる諸国の一般化がなされないかぎり、ことばの本来の意味での教育法則とはいえないであろう。

小論の不備な点は、(1)労農予備校消滅期、すなわち、1930年代後半の資料が乏しく、消滅へと導いた労農予備校の内部矛盾の解明が十分でないこと、(2)労農予備校の教授＝学習過程と訓育＝創造過程にかんしプログラムにまで立ち入った分析が十分でないこと、(3)労農予備校と同様、革命当初に人民大衆がつくり上げた工場実習学校(ФЗУ)と農村青年学校(ШКМ)との比較研究がなされていないこと、である。

教育と生産的労働の結合の仮説と教育法則との検討、およびこれら不備な点の充全が今後の研究課題となる。さしあたっては、労農予備校のプログラムにたちいった分析と、社会主義的工業化との関連で工場実習学校を、農業集団化との関連で農村青年学校を分析しなければならない。

Диктатура пролетариата и народное образование в переходном периоде от капитализма к социализму

—Объективно-данное исследование о возникновении, развитии и прекращении Рабочих Факультетов (Рабфаков)—

Такэда Масанао

Наша современная эпоха характеризуется переходным от капитализма к социализму. Она эпоха изменения нового времени и, говоря о народном образовании, эпоха преодоления педагогических идей нового времени.

В этой статье автор считает осветить, по объективно-данным изучением о возникновении, развитии и прекращении Рабфаков, существовавших только в переходном периоде в СССР, как изменялся „принцип равной для всех возможности народного образования в соответствии с каждой способностью“ — один из основных педагогических идей нового времени — и каково же педагогическое положение в переходном периоде. В этом случае нельзя игнорировать условия НЭП и диктатуры пролетариата.

Рабфак был организован осенью 1918 г. как курс для подготовки рабочих и крестьян в высшие учебные заведения. Передовые рабочие и студенты боролись с „автономистами-студентами“, мелкобуржуазными интеллигентами и старыми профессорами, заставили вуз учредить Рабфак при вуз. Творческими силами народных масс был организован Рабфак как новый тип учебного заведения в переходном периоде, и был окончательно оформлен постановлением Наркомпроса и декретом СНК. Таким образом, разнообразные учебные заведения в системе народного образования переходного периода создались творческой силой народных масс. (см. ФЗУ и ШКМ в СССР, а Хонгшун университет, Нуне и Таимаозу средняя школа в Китае). В этом деле представлялось первое положение педагогики в переходном периоде.

Второе положение в переходном периоде сделан понятным по изучению о развитии Рабфаков — об изменении условия для поступления в Рабфаки, об улучшении социального и партийного состава рабфаковцев и преподавателей, об увеличении и уменьшении числа Рабфаков, рабфаковцев и преподавателей, об удлинении и сокращении срока обучения, об изменении содержания и метода в процессах обучения и воспитания. Именно, в начальном периоде НЭП, восстановительном периоде — основная задача власти диктатуры пролетариата была подавление противного класса — „знание классовый борьбы“ и повышение партийности рабфаковцев

были отмечены, а в среднем периоде НЭП, в периоде социалистического строительства страны — основная задача власти диктатуры пролетариата была строительство — „знание производственной борьбы“ и повышение специальности рабфаковцев.

Третье положение выведено по изучению всего процесса — возникновения, развития и прекращения — Рабфаков. Оно значит, что „принцип равной для всех возможности народного образования в соответствии с каждой способностью“ как педагогическая идея нового времени был преодолен „принципом преимущественной возможности народного образования для рабочих и крестьян“. В переходном периоде „принцип преимущественной для рабочих и крестьян возможности народного образования“ значит принцип настоящей „равной возможности“. Это основывается на том, что возможность народного образования создается производственным трудом рабочих и крестьян.

Так, принцип равной для всех возможности народного образования вместе с коллективным воспитанием и политехническим обучением следует стать фактором марксистского принципа „соединения образования с производительным трудом“. И, может правильно понимать принцип „равной для всех возможности народного образования“.